



D E N S H Ō  
*The Japanese American Legacy Project*

## 教師用リソース・ガイド

ウェブサイト版

IN THE SHADOW OF MY COUNTRY—祖国の影で  
日系アメリカ人アーティストの追憶



日系アメリカ人レガシー・プロジェクト



D E N S H Ō

*The Japanese American Legacy Project*

Copyright © Densho 2003: 日系アメリカ人レガシー・プロジェクト 無断転載禁ず

ウェブサイト「In the Shadow of My Country—祖国の影で—日系アメリカ人アーティストの追憶 (www.densho.org/shadow)とこの教師用リソース・ガイドは、米日財団の寛大な助成金によって可能となった。このプロジェクトは、ワシントン州アート・コミッションとナショナル・エンドーメント・フォー・ザ・アーツから補助金を受けている。

モニカ・ソネ著、「日系二世の娘」からの抜粋「ハーモニー収容所での生活」は、著者の許可を得て転載された。1953年にリトル・ブラウン・アンド・カンパニーより初版が出版され、1979年にワシントン大学プレスによって再版された。

このプロジェクトは、ダグ・セルウインとポーラ・フレイザーが教育コンサルタントを担当した。

Densho (将来へ伝えるの意味) は、第二次世界大戦中の日系アメリカ人の強制収容を記録した体験記や歴史写真などのデジタル・アーカイブを開発している。このアーカイブやウェブサイト (www.densho.org) 上に掲載された学習用カリキュラムを通して、市民の自由と社会正義の大切さを啓蒙する。

詳しくは、下記まで連絡を下さい。

日本語編集：北田千秋

Densho : 日系アメリカ人レガシー・プロジェクト

住所： 1416 South Jackson Street  
Seattle, WA 98144 USA

電話番号： 206-320-0095

ファックス番号： 206-320-0098

Eメール： [info@densho.org](mailto:info@densho.org)

ウェブサイト： [www.densho.org](http://www.densho.org)

カバー・イメージ：ロジャー・シモムラ作「An American Diary」の「1941年12月7日」より 1997年 11 x 14 インチ アクリル・キャンバス 同アーティストから無料で提供される。

Revised: August 26, 2003

## 目次



「In the Shadow of My Country—祖国の影で 日系アメリカ人アーティストの追憶」の導入	4
日系アメリカ人強制収容の起因	5
年表	13
レッスン	22
学習者向け読書教材：日系アメリカ人の強制収容	35
学習者向け読書教材：ハーモニー収容所での生活」	37
用語の注釈	54
他のリソース	56

## 「In the Shadow of My Country－祖国の影で：日系アメリカ人アーティストの追憶」の導入

この教師用リソース・ガイドは、Densho の学習用ウェブサイト ([www.densho.org/kage](http://www.densho.org/kage)) 「In the Shadow of My Country - 祖国の影で：日系アメリカ人アーティストの追憶」と併用する目的で企画された。このマルチ・メディアのウェブサイトでは、真珠湾攻撃後、ロジャー・シモムラ氏の家族が立ちのかされ、強制収容された体験をイメージする作品のシリーズ、「An American Diary」を特集している。その絵は音楽やシモムラ氏のインタビュー、強制収容された日系アメリカ人の言葉、当時の写真、歴史解説、シモムラ氏の作品「Memories of Childhood」とともに紹介されている。ウェブサイト上の本文は、全て日本語でも提供されている。

シモムラ氏の家族がシアトルの家から追い出され、ワシントン州ピュアラップで一時収容され、その後アイダホ州のミニドカに強制収容された時、ロジャー・シモムラ氏は3歳であった。アーティストの祖母（トク・シモムラ）は、シアトルで評判のいい助産婦であり、長い間に、1000人以上の赤ちゃんを分娩させた。彼女は、結婚のため渡米するまで日本で看護婦をしていた。彼女の日記が「An American Diary」を着想させた。日系アメリカ人を苦しめた屈辱感や不当な処置に対するロジャーの風刺のきいた解釈とトクの鉄条網の中での生活に対する悲しくも冷静な受け止め方が対照的である。

一家族の思い出とウェブサイトのリソースを通して学齢期の子供を多く含む12万人が強制立ち退きを迫られ、収容された影響の大きさを学習者に、理解してもらいたい。シモムラ氏の絵や歴史写真、コメントを学習することで、強制収容の歴史的背景を調査し、現在の事件との関連性を見出すことができる。この学習活動はアメリカの5年生から12年生用の授業として適当な内容である。

このガイドは、教師及び学習者向けの歴史の概要、年表、モニカ・ソネ著の「日系二世の娘」からの抜粋や用語の注釈、他のリソース、3種類のレッスン例を含む。多岐の分野にまたがるレッスンは、アーティストのテーマやコミュニケーションの意味を分析し、情報を批判的に受け止め、多民族の人権と国家の安全性との兼ね合いについて真剣に考えることを学習者に求める。第二次世界大戦中に起こった市民の自由侵害と、現在行われている国家の安全と個人の権利に関する論議を、学習者が関連づけて考えられるよう支援することが我々の目的である。

### 他の Densho のリソースについて

Densho は、第二次世界大戦中の強制収容を教材とする教師のために、日系アメリカ人の人生体験に関連した市民の自由に対する疑問など多岐の分野にまたがるレッスンを考案している。このウェブサイト ([www.densho.org](http://www.densho.org))では、スタンフォード大学インターナショナルや比較文化プログラム (SPICE)と協力して多くのカリキュラムを提供しており、口述史や歴史のビデオなど多数のデジタル・アーカイブを公開している。アーカイブを利用するには登録が必要だが、無料で閲覧できる。Densho は、これらの教師用リソースを有効に利用できるよう支援する。コメントは、[info@densho.org](mailto:info@densho.org)まで。

## 日系アメリカ人が強制収容された要因

1941年12月、真珠湾攻撃の被害を受け、第二次世界大戦に突入すると、アメリカ政府は、西海岸に住む全ての日本人移民とアメリカで生まれたその子供達を監視し始め、拘束、撤退を強制し、遠隔地に監禁した。このことはアメリカの司法制度に違反している。犯罪行為ではなく、人種偏見から、約12万人の財産と自由、尊厳までもが剥奪されたのである。

## 偽りの正義

### 論拠のない軍事的必要性

アメリカが第二次世界大戦に突入すると、軍の上層部は、日本人の祖先を持つ、子供から大人まで誰一人として、本質的に信用できるものでなく、アメリカ合衆国に対し、不忠で危険な存在となる可能性があるとして、ルーズベルト大統領に主張した。彼らによる破壊活動をその可能性ですら具体的に示す証拠が何も無いまま、陸軍省は、西海岸の日系人全体に対し、軍事上の必要性という名目で隔離するよう要請した。

日系アメリカ人は、対日戦争下においてもアメリカ合衆国に対し、極めて忠実で国家安全の脅威にはならないという、調査当局や、海軍情報部、国家通信部、FBIの調査による報告が戦前にあったのにも関わらず、それを一切考慮せず、ルーズベルト大統領は、大統領命令9066号に調印し、日系人を西海岸から強制収容することを是認した。

*子供をつれてこの国に移民してきた日系一世は、自国の神、天皇、家族、祖先全てを捨て、アメリカに忠義を尽くさねばならない。彼らは確かに全てを捨てた・・・。(中略)・・・日系二世は、アメリカで教育を受け、人種差別されながらも、アメリカ国民になりきろうと痛ましい努力をしている。*

--カーティス・B. マンソン 「ルーズベルト大統領への報告書」より

### 保護拘置の理由づけ

アメリカ政府は、日系アメリカ人の大量収容と拘置を処罰行為ではなく、保護行為であると表明した。軍事的必要性が論議され始めると、連邦政府は、真珠湾攻撃後の日系人に対する自警行為の懸念を引き合いに出し、西海岸から撤退させ、収容所に拘置することが日系アメリカ人の為になると主張した。(実際は、大統領命令9066号の調印後、暴力が増加した。)

中には、今でもこの正当化された偽りを信じているアメリカ人もいる。しかし罪のない一般市民と平和を守ることが、政府の義務であり、治安が極度に脅かされる状況においてのみ軍事介入すべきである。この数年にも及ぶ罪のない国民に対する強制収容は、保護目的では決してなかった

のである。この「集合所」に到着した日系人は、自分達の政府によって、有刺鉄条網で張り巡らされた所で監禁され、武装した衛兵に監視されている事実には愕然とした。

“集会所と呼ばれるところに連れて行かれました。至る所に衛兵がマシンガンを持って、集会所の内側に向けて立っておりました。外側ではなく、内側だったのです。このときに始めて現実を思い知らされました。”

ジーン・アクツ (Densho アーカイブより)

## 消えない疑問

戦後何年もの間、日系人は、この衝撃的な経験を恥じながら、一生懸命に生きてきた。子供たちにすら隠し語ることはなかった。この不愉快な出来事は学校の教科書にも殆ど出てこない。従って、この大量監禁の根本的な要原因とその影響を知るアメリカ市民が殆どいないのは、当然と言える。

この忘れがたい事実には、まだ疑問が残る。民主主義はなぜ、平等原則を法律から放棄してしまったのか。なぜ外国のファシズムと暴政に戦ってきたアメリカが自国の移民とアメリカ生まれの国民の権利を侵害したのか。数十年後に大統領が謝罪し、議会在、強制収容された生存者に対し、補償金を支払った。しかし多くのアメリカ人がこの偽りの軍事的必要性と保護拘置の正当化を容認していることには変わりない。日系人の誰一人として、スパイ行為や破壊行為をしたものはいないことを知る人は余りいない。ましてや20年前に国会がこの大量監禁を軍事的理由でなく、人種差別、戦争ヒステリー、そして、リーダーシップの欠如が要因であったと認めたことを知る人は、殆どいないのが現状だ。この3点の要因と4点目の経済競争の要因が今ここで究明される。

## 真の動機

### 人種差別

怒りと衝撃を引きおこした真珠湾攻撃は、強制収容の引き金となったが、収容所を生み出す状況は、一世紀も前から始まっていた。カリフォルニア州でゴールド・ラッシュが始まって以来、アジア諸国からの移民は辛らつな差別に耐えながら生活していた。西海岸に住む中国人労働者に対し、人種差別をしたり、雇用を拒否したり、または地主が借地権を拒否し、家を追い出してもそれは法律によって許される行為であった。彼らは、市民権を持つこと、事業許可をとること、白人に対して法廷で立証すること、白人との結婚などが禁止されていた。無数のアジア系移民が直接に処罰を科せられない暴力の被害者となった。

日本人労働者も中国人労働者の後に続き、組織化された反アジア人・グループの陰謀に悩まされた。1882年、中国人に対する非住居法令が通過すると、白人至上主義者集団は日本からの移民も全面的に禁止するよう議会在に圧力をかけた。カリフォルニア州や他の西部の州では、日系移民は、農地を所有したり、賃貸したりしてはならないという外国人土地法が通過した。学校、商業組合、住宅地など全ての場所で人種差別があった。この歪んだ論理で、反アジア系政治家や運

動家達は、日本人を社会から計画的に締め出したのにもかかわらず、日本人は、アメリカ社会に溶け込めないと一方的に決めつけた。

「日本人は、農業、漁業、ビジネスにおいても、常に白人よりも勝る能力を実証してみせる。贅沢や楽を好まず、勤勉である。女をこき使うが、寄り添って互いに助け合っている。アメリカ人にはまねできないことだ。」  
シアトル反日本人会長 ミラー・フリーマン

1900年代の大衆紙もあからさまに差別的であった。アジア人を非人間的に描写し、敵愾心をあおった。中国人や日本人は、サルのように信頼できない、奇妙な外国人として描写された。西海岸のハースト・ニューズペーパーは、イエローペリル（危険な黄色人種）と差し迫る対日戦争を取り上げ、恐怖を駆り立てた。大多数のアメリカ人は、アジア人との接触が殆どなく、この悪いイメージを信じやすい環境にあった。

イタリア人やドイツ人のようなヨーロッパからの移民と違い、日系1世は、アメリカに何年住んだとしても、働いたとしても市民権を得ることは許されなかった。1790年最高裁は、「自由な白人」のみが市民権を得る資格があると声明した。（南北戦争後、アフリカ系移民またはその子孫は、奴隷から解放され、市民となることを許された。）これに対し、一人の日系移民が1922年にこの法律に対し、異議を唱えたが、却下された。（オザワ訴訟）日系移民が帰化できるようになったのは1952年になってからである。この法律上の人種差別は、多大なる悪影響を及ぼした。宣戦布告とともに、アメリカで生涯暮らし、働いてきた日系1世は、頭から敵国の外国人として見なされ、強制収容の対象とされた。

「東洋人がアメリカの市民権を得ることは許されなかったのです。他の人種とは、全く異なる人種であり、平等に扱われるべきではないと見なされていました。ある地域では敵対視され、またほとんどが東洋人について何も知らないのですから、どうでもいい存在だったのです。ましてや私達が信じてきた全ての人間における平等の権利など、考えもしなかったのです。」  
エレノア・ルーズベルト

日系二世は、出生によってアメリカの市民権が得られた。（真珠湾攻撃後は、政府当局は、日系二世を非外国人と婉曲的に呼んだ。）人種差別をされながら、育った二世ではあったが、第二次世界大戦が始まるまで、憲法によって保証された権利を全面要求することができた。しかし戦争ヒステリーが広まると、民主主義が機能しなくなった。

どこで生まれようが、油断できない人間は油断できない。日本人の親をもつ日系アメリカ人は、名目上は、市民権はもっているが、必然的にアメリカ人としてではなく、日本人として育つのだ。日系人全体が敵として扱われることで、幾人かが不当な待遇を受けることになるかもしれない。しかし国のため、または個人の防衛のためには、彼らの人種と我々が戦争状態にある以上、そのような待遇は認められるべきであろう。  
ロサンゼルス・タイムズ 社評

## 戦時中のヒステリー(異常心理)

1930年代、日本の太平洋における国力の進展と軍事侵略は、アメリカを恐怖に駆り立てた。第二次世界大戦当初は、日本軍が、決定的な勝利をおさめ、恐れたアメリカは、スケープゴートを探した。以前から日本人の移民に反対していた、ジャパニーズ・イクスクルージョン・リーグ、アメリカン・リージョン、サン・オブ・ゴールドデン・ウエストなどの反日本人団体がそれを絶好の機会とみなし、悪質なプロパガンダ活動を始めた。

大衆紙やラジオ・ジャーナリスト達は熱狂し始め、西海岸に住む日系アメリカ人がスパイ活動や、破壊活動をしているという、ありもしない話を広めた。ジャーナリスト達は、日本が、アメリカ本土への緊急攻撃を企んでいるという情報を得たと主張し、日本人の祖先を持つ、日系人がその手助けをするのだと報道した。政府関係者は、この報道は、事実無根であると分かっていたのにも関わらず、見て見ぬふりをしていたのである。

*「新聞社がこぞって日本を批判し、騒ぎ立てました。日系人もスパイ活動や破壊活動等に関係している」と主張したのです。私達にとっては、大変ショックなことでした。新聞社がそんなうそをつくとは、根も葉もないことを報道するとは、信じられないことでした。」*

フランク M (Densho アーカイブより)

*“FBIの調べによると、真珠湾攻撃の直後に起こった船や港への攻撃に、陸上でのスパイ作が関連している事実はどこにもない。”*

—FBI長官 J. エドガー・フーパー

恐怖や、虚偽、歪んだ愛国心、人種的偏見がアメリカの理念である個人に対する正義を揺るがした。一般市民は、アジア人全体を反逆者と見なし、日本人の顔をしている人間は皆敵であると、思いがちであった。隣人や学校の同級生なら、日系人も彼らと同じ父であり、母であり、学生であり、労働者であると知っていたであろう。しかしプロパガンダに使われたポスターが、つめと出っ歯をむき出しにしてせせら笑っている帝国軍隊のイメージを作り上げてしまった。誤った情報を知らされた一般市民は恐れをなし、平和を好む働き者の移民とその子供たちと、外敵との違いを見極めることができなくなっていた。

このように状況がエスカレートしていき、人々は正確な判断ができなくなっていた。大量収容の提唱者は、日系人に対する疑惑が証明できないまま、破壊行為が実際に行われなかったのは、それを企んでいたからだと主張した。16分の1以上日本民族の血統をひいて入れば、強制収容されてしまうというように当時は日本人と言うだけで大変危険と見なされていた。孤児院やフォスター・ホームの幼児や子供までもが軍事上の危険性があるとされ、強制収容されるという、狂気の沙汰であった。

*現時点で破壊行為が行われていないという事実が、今後破壊行為が起きうるという兆しであり、まことに気がかりである。*

—西部ディフェンス・コマンド、ジョン・デウィット中将



このような事態に対する反対意見は極めて少なかった。教会団体、特にフレンド派やクエーカー教徒、そして勇気ある少数の人達だけが憎しみとヒステリーに包まれたこの異常な情勢を非難した。しかし、日系人は孤立しており、政治的な力を持っていなかった。年配の世代は選挙権を持っていなかったし、殆どの若い世代まだ10代であった。日系アメリカ人は、拳銃を突きつけられながら、ルーズベルト大統領自身が強制収容所と呼んだ場所に連行される以外、何の抵抗をすることもできなかったのである。

## 政治的リーダーシップの欠如

西海岸に住む全ての日系人を強制退去させることに関しては、反対意見もあった。政府関係者の中で激しい議論がなされた。日系人の農業者や漁業者が軍施設近辺に住んでいたという事実以外に何も破壊行為を示す糸口が見つからないまま、陸軍省は、警戒措置として男女、子供全ての日系人を退去させ、監禁収容を推進した。立法府はその決定を支持し、西部地区代表の国会議員は、地元の市民達に強く押され、撤去収容令を要求した。

*どう転んでもジャップはジャップである。奴らの忠誠心は、信用できない。それはアメリカ国籍をもっていようがいまいが関係ないことだ。*

—ウエスタン・ディフェンス・コマンド ジョン・デウィット中将

閣僚の一人で、政治的影響力の余りなかった検事総長、フランシス・ビドルは、この大量収容は、無益で、しかも違憲行為であるとルーズベルト大統領に申し立てた。FBI長官、J. エドガー・フーバーも、大量収容する必要はないと一貫した姿勢を維持した。しかしこのような意見も日系人は脅威に値しないという情報機関からの報告も一切無視し、ルーズベルト大統領は、政治的に好都合な決断を下し、大統領命令9066に調印した。

*「ルーズベルト大統領によって決断されたこの大統領命令は、軍事的な判断からきている。大統領に初めに言ったように司法省は、この決断に反対していた。この収容に関して、司法省は、全く無関係である。」*

検事総長 フランシス・ビドル

政府間の力の均等が崩壊し、最高裁は、この大統領命令9066号の調査を放棄した。日系人が夜間外出禁止令や退去命令に抗議した模擬審判の審問で、最高裁は、この具体性のない、軍事的必要性という論拠を受け入れ、憲法で保障されている権利を特定の人種から剥奪することを容認した。民主主義の原則である正当な法の手続きと守られるべき法律上の平等保護条約は、12万人に対し、適用されなかったのである。しかもそのうち3分の2は、アメリカ市民が占めていた。

*日本人の祖先を持つ在留外国人と、非外国人を西海岸から退去させることは、違憲行為であり、人種差別が泥沼化していくことになる。具体的な裏づけがないまま軍事的必要性と称して憲法上の権利から個人を排除してはならない。*

最高裁判事 フランク・マーフィー

コレマツ訴訟の反対意見より

## 経済上の動機付け

大量拘束を引き起こした4点目の要因である経済的動機が、他の3点の要因を浮き彫りにした。人種差別的な反アジア組織は、長年低賃金と失業を日本人労働者のせいにしてきた。労働組合や他の経済上の動機をもつ排日運動家達が煽り立てたプロパガンダによって戦争ヒステリーに火がついた。憲法を守るべき立場の国家の指導者達も、経済的な競争相手である日系アメリカ人は、收容されるべきであるという要求に屈した。

*「西海岸の多くの人々は日本人を信用していなかった。彼らが農場からいなくなることで競争相手がいなくなることを望み、それによって私益を増やす人が多かった。」* —  
検事総長 フランシス・ビドル

日系一世は、外国人土地法によって規制されていたが、白人の農業者にも匹敵するまでになっていた。カリフォルニア州では、日系アメリカ人が6700万ドルに相当する作物を生産し、それは州全体の生産量の一割を占めていた。しかし第二次世界大戦が始まるとその生産は、なくなった。日系人は一週間以内に土地を手放すよう強制され、強制收容所で避難という名目で監禁された。するとそれまで彼らが生涯かけて築き上げたビジネスや所有物などの財産を安く手に入れようとあさりに来るものが殺到した。農業者や漁業者または、会社経営者であり、世帯主であった日系アメリカ人は計り知れない損失に苦しみ、それが他の人にとっては利益となった。

*「ウエスタン・ファーム社が、私たちの留守中に農場を経営し、作物を収穫して、その利益は、私達のもとへ送ってくれることになっていましたが、・・・(中略)・・・農場は売ってしまったのか、わかりませんが・・・(中略)・・・私達の家は全て略奪されてしまいました。私達がいなくなったその夜に、日本人が住んでいた家に何台ものトラックがきて、ものをあさり、持ち逃げしていったと白人の友人が教えてくれました。」*  
ミツコ H (Densho アーカイブより)

ハワイのように、経済上の動機付けが逆に功を奏した特例もある。本土で陸軍省は、人種によって忠誠心は変わってくる。従って日本人の祖先を持つ全員が売国行為の危険性を秘めていると、唱えていた。しかし実際に爆撃されたハワイでは、人口の35%を日系人が占めており、軍指導者達は、大規模な強制收容に反対した。この戦略上重要な位置にあるハワイでは、日系人の労働力に依存していたからである。もしいなくなれば生産が止まってしまうという状況だったのである。この場合、経済的な必要性から、日本人を信頼せずにはいられなかった。

## 戦後

日系アメリカ人は、戦後強制收容所から次第に解放されたが、人種差別に引き続き悩まされていた。一世や二世達がアメリカ政府によって監禁されていた時期の日本軍の戦争捕虜への待遇に対する反感が強まってきた。日系人は、またも汚名をきせられ、人種差別をされた。

日系アメリカ人にとって、再定住は、強制收容の苦しみに匹敵するほど衝撃的であった。元の場所に帰っても全てを失ってしまった人達が殆どであった。戦前に所有していたものは全て、盗難に遭い、放棄され、加算税が強制された。(收容中に働いた賃金は、ごくわずかなものであった。)住宅や雇用に関する人種差別は戦後の方がはるかにひどかった。このような窮地に追い込んだに

も関わらず、政府は片道の交通手段と一人当たり25ドル支給しただけであった。このようにして精神的な傷あとを負い、日系アメリカ人は、人生のやり直しを強いられたのである。

1980年代に、法律研究家達は、戦時中の強制収容を支持したとされる政府弁護団が最高裁で勝訴するよう、証拠を差し止め、文書を工作していたことを発見した。この訴訟は再開され、連邦地方裁判所は、被告人を無罪としたが、最高裁でこの訴訟は再審されることはなかった。アメリカ政府による大規模な強制収容を容認したコレマツ訴訟はその後再審されることもなく、今もなお、危険な先例として残っている。

*コレマツ訴訟は、我々の法律と政治の歴史の一頁として残っている。この歴史的先例は、戦争や軍事上の必要性に直面した時、政府は憲法下において本来の国民の人権を守るべきであるという教訓として活かされなければならない。・・・(中略)・・・この先例は、対米国際紛争や対立に直面した時、誘発されがちな卑劣な恐怖心や人種差別から全ての国民を守るために立法、行政、司法の三権を行使するべきであるという教訓として活かされなければならない。*

一米連邦地裁 マリリン・パテル裁判官

数十年後の1988年に、補償運動が高まり、人権擁護法令が通過した。第二次世界大戦中に強制収容された生存者達は、補償金とブッシュ大統領からの謝罪状を受け取った。その謝罪状には、「我々は、過去に犯した不正を正すことはできない。しかし、第二次世界大戦中におきた日系アメリカ人に対する不当な処置を認める。賠償金を支払い、心から謝罪することによって、アメリカ国民は、本来の意味での自由と、平等と正義という我々の理想に向けての責務と認識を新たにした。」と記されている。市民権が 国家の安全保障に再び脅かされつつある現在、アメリカ市民と住民は、憲法を拠りどころにしなければならない。

## 参考文献

バートン, フェブリー 他

監禁と民族的背景：第二次世界大戦中の日系人強制収容状況の概要 ナショナル・パーク・サービス 人類学74 (1999年)

戦時中の一般市民の強制疎開と強制収容史委員会 拒否された個人の正義：戦時中の一般市民の強制疎開と強制収容史委員会からの報告書 (1982-83年)  
シアトル ワシントンユニバーシティプレス (1997年)

日系人市民協会全米教育委員会 アメリカ史から学ぶこと：日系人の経験 カリキュラムと資料ガイド第4改訂版 (2002年)

ニイヤ、ブライアン、日系人史の百科事典 ロサンゼルスジャパニーズアメリカン・ナショナルミュージアム改訂版(2001年)

ロビンソン, グレグ 大統領命令：FDRと日系人の強制収容 ケンブリッジ ハーバードユニバーシティプレス (2001年)

ウエグリ、ミチ・ニシウラ 長年の不名誉(1976年) シアトルワシントンユニバーシティプレス (1996年)

## 年表

1790年3月26日 連邦議会は、1790年3月26日付けの市民権法令により、連邦司法権の及ぶ区域内に2年間居住し、自由なる白人の外国人ならば、市民権を与えられる場合もあると表明する。

1854年 アメリカ海軍提督マシューコモドア・ペリーが、江戸湾（現在の東京）に入港し、日本は200年の鎖国を終える。

1869年 日本人初の移民がサンフランシスコ付近のゴールド・ヒルに到着する。

1873年 「アフリカの出身または、子孫の者」という言葉が1790年にしかれた法令に付け加えられ、1952年まで日本人や他のアジアの移民が市民権を持つことが禁止される。

1882年5月6日 連邦議会で中国人排除法令が通過し、以後60年間中国からの移民が停止する。

1885年 サトウキビ畑で働くため、プランテーション所有者が雇った、日本人労働者がハワイに到着する。

1885年9月2日 反国人の暴徒がワイオミング州ロックスプリングのチャイナタウンに放火し、28人の鉱夫が死亡、15人の負傷者が出る。原因は、中国人の低賃金労働や、スト破りに対する反中国人感情が爆発した結果であったが、白人16人の容疑者全員が無罪とされる。

1892年 中国人排除法令により、労働者の不足が生じ、そのことによって、アメリカ本土へ移民する日本人が増加する。

1893年 サンフランシスコの教育委員会が日本人の子供に対し、人種差別を始める。日本政府がそれに抗議する。

1894年6月27日 アメリカの地方裁判所は、日本人移民は、1790年に施行された市民権法の「自由な白人」ではないことから、市民権を得ることができないとする。

1900年5月7日 多数の労働団体によって組織化された初の大規模の反日本人デモがカリフォルニア州で起こる。

1904年 アメリカの労働連合組合の全国大会で、日本人、中国人、韓国人の入会を拒否することが決議される。

1904～1905年 日露戦争で日本が勝つ。

1905年2月23日 サンフランシスコ・クロニカル紙で「日本の侵略—時間の問題」とフロント・ページに記載され、サンフランシスコ付近で日本人に対する人種差別に拍車がかかる。

1905年5月14日 アジア人排除連盟がサンフランシスコで結成される。出席したのは、最初に反日本人運動を組織したとされている、労働者の先導者やヨーロッパからの移民であった。

1906年10月11日 サンフランシスコの教育委員会で、中国人、日本人、韓国人の血統を持つ子供を白人から分離する決議案が可決される。

1907年 セオドア・ルーズベルト大統領がサンフランシスコ教育委員会に対し、日本人学生への人種差別を撤回することを命じる。反日本人の暴徒が勃発する。

1908年 日本とアメリカが日本人労働者のアメリカへの移住を中止する紳士協定を正式に承認する。ただし日本人女性は、アメリカの居住者の妻であれば、移民を認めるものとする。

1910年 韓国が日本領となる。

1913年 カリフォルニア州で外国人土地法が通過し、外国人が土地を所有することが禁止され、後に土地の賃貸も禁止される。他の12州も同じような法律を採用する。

1914～1918年 第一次世界大戦

1915年 以前から日本人移民を敵視していたハースト・ニューズペーパーは、扇情的な記事でイエロー・ペリルというキャンペーンを強化する。

1920年 日系アメリカ人農業者が、カリフォルニア州の収穫高の10%以上に値する6700万ドルを生産する。111,000人の日系アメリカ人がアメリカに居住し、その内81,500人が移民で29,500人がアメリカ生まれである。アメリカ政府に圧力をかけられ、日本は花嫁移民に対してパスポートの発行を禁止する。

1920年 アメリカ人女性の選挙権が米国憲法の19番目の修正条項に加えられる。

モハンダス・ガンディーが、イギリスからのインド独立を主導する。

1920年11月 1913年に始まった外国人土地法の抜け穴をふさぐためのより厳しい新外国人土地法がカリフォルニア州で通過する。

1921年 アイルランドは、イギリス政府との条約に署名し、独立をはかる。

1921年7月19日 白人自警団が、カリフォルニア州ターロックから銃を突きつけて58人の日本人労働者を追い出す。他にも、カリフォルニア州、オレゴン州、アリゾナ州の至る所で日本人労働者の追放がおこる。

1922年 ベニート・ムッソリーニが、イタリアでファシスト党政府を率いる。

1922年11月13日 最高裁がオザワ訴訟で日本人移民のアメリカ市民権の取得禁止を再確認する判決を下す。

1922年 連邦議会が、市民権を持たない外国人と結婚する全ての女性のアメリカ市民権を消滅させるというケーブル法案を可決する。

1924年 連邦議会は、日本人に対しアメリカ合衆国に移民することを全面的に禁止する1924年度移民法を可決する。

1925年 ワイオミング州のネリー・タイロー・ロスがアメリカ初の女性知事として当選する。

1926年 日本の昭和天皇が即位する。

1929年 アメリカの株式市場が暴落し、世界大恐慌へと突入する。

1933年 アドルフ・ヒットラーがドイツの首相に就任する。

1935年9月15日 ニューレムバーグ法に基づき、ユダヤ人は、ドイツの市民権を失う。

1937年 中国と日本が満州をめぐる戦争を始め、イギリスとフランスがドイツに対し戦争を宣言する。

1939年 フランクリン・ルーズベルト大統領が、日本に対し、原料品輸出禁止措置をとる。

1939年9月 ドイツ軍が、ポーランドを侵略する。

1939年2月 ルーズベルト大統領は、ドイツ系ユダヤ人の子供の移民枠を緩和するワグナー・ロジャース法案（子供難民法案）を保留にする。

1939年5月 セント・ルイス号に乗船した937人のドイツ系ユダヤ人は、フロリダの海岸でルーズベルト大統領からの難民の申請要求に対する回答を待つが、大統領は、沈黙を守る。結局セントルイス号は、ヨーロッパに引き返し、乗船客の多くが強制収容所に送られることになる。

1941年11月 ルーズベルト大統領によって委任された調査の結果、マンソン報告書は、日系アメリカ人の大多数がアメリカ合衆国に対し、忠実であり、対日戦争の場合でも国家の安全保障に脅威を及ぼすものではないと結論づける。

1941年11月1日 サンフランシスコのプレシディオ校にて、日本語学校が結成される。後に軍情報部の語学学校と改名され、後にミネソタ州のスネリング駐屯地に移る。二世と帰米の卒業生が、太平洋戦争圏内で暗号解読者及び通訳として活躍する。マッカーサー大将の情報長官は、二世と帰米の活躍は、戦争の終結を2年早めたと語る。

1941年12月7日 日本がハワイの真珠湾でアメリカ軍事基地の戦艦と戦闘機を爆撃する。3,500人以上の軍人が死傷する。ハワイにて戒厳令が布告される。

1941年12月7日 FBIが日本人移民の仏僧、日本語教師、新聞発行者を含む文化、企業などの地域社会の指導者を特定し、逮捕を開始する。48時間後には、1291人の身柄が拘留される。その男性の多くが戦時中、司法省によって拘禁され、家族と離れ離れになる。

1941年12月8日 ルーズベルト大統領は対日宣戦布告を発表し、議会がそれを承認する。

1941年1月～12月 FBIは、西海岸の日系アメリカ人数千人を家宅捜査し、短波ラジオ、カメラ、伝家の宝刀や農地で切り株を処理する為に使われる火薬類などを禁制品として、押収する。

1941年12月11日 西部ディフェンス・コマンドが、設置され、ジョンL・デウィット中将が司令官となる。

1941年12月15日 破壊行為の証拠が何も無いまま、海軍のフランク・ノックス書記官は、報道機関に、「私は、この戦争において最も実効的な裏切り行為がハワイで行われたと思う。」と発表した。

1941年1月5日 陸軍省が日系アメリカ人の男性をアメリカ市民でありながら、4-Cすなわち、敵国外国人として、類別する。

1941年1月26日 海軍の情報部と少佐のK.D.リングルが日系アメリカ人の大量強制収容に対し反対する。

1942年2月19日 ルーズベルト大統領は、大統領命令9066に調印し、裁判や審理なしで市民を排除する権限を軍に与える。その大統領命令は、日系アメリカ人として特定はしていないが、結果として監禁されたのは、日系アメリカ人だけである。



1942年2月25日 アメリカ海軍がロサンゼルス付近のターミナルアイランドに住む全ての日系アメリカ人500世帯に対し、48時間以内に退去するよう命令する。かれらは最初に集団で移動させられ、多大なる損失を負わせられる。

1942年3月2日 西部ディフェンス・コマンド長官であるデウイット大將は、布告番号1を発行し、日系アメリカ人が、軍事基地へ立ち入ることを禁じる。日本人の移民と市民は、年齢を問わず全て、ワシントン州西部、カリフォルニア州、オレゴン州、アリゾナ州の一部から退去することになる。

1942年3月2日 日系アメリカ人は、政府の出費を減らすために立ち入り禁止地域から内陸地へ任意で移るように促されたが、誰も知らない敵愾心に満ちた東部に移るものはほとんどいなかった。

1942年3月5日 カリフォルニア州は、34人の日系アメリカ人の公務員を任務から「解放」した。

1942年3月18日 ルーズベルト大統領は、大統領命令9102号に調印し、日系アメリカ人の西海岸からの強制退去を監督する責任者としてミルトン・アイゼンハワーを任命。戦時強制収容局を設立した。

1942年3月21日 戦時における政府の市民統制下、最初の16の集会場がオープンし、強制収容所が完成するまで、男女、子供およそ92,000人が拘留される。

1942年3月24日 陸軍による最初の市民退去命令がシアトル近辺のベンブリッジアイランドにて発行される。45世帯が6日間以内に準備するよう通告された。1942年10月の終わりまでに、107の退去命令が短い猶予期間をもって通告される。

1942年3月27日 陸軍がワシントン州の西部地域、カリフォルニア州、オレゴン州在住の日系アメリカ人全員に対し、住所を変更することを禁止したため、「任意の移動」は、なくなる。デウイット大將は、日系アメリカ人は、同州の東半分からも排除しなければならないと発表する。

1942年3月27日 日本人の血統を持ち、ワシントン州の西部、オレゴン州、カリフォルニア州、アリゾナ州の一部に住む者は、全員夜間外出禁止を強要され、夜の8時から朝の6時まで自宅から出てはいけないことになる。また、家から5マイル以上離れたところに行くことも禁止される。

1942年3月28日 ミノル・ヤスイ・が裁判所で夜間外出禁止令の規制を試すため、ポートランドの警察署に出頭する。

1942年5月 最初に拘束された日系アメリカ人は、常設のWRA 監禁施設、すなわち強制収容所に移された。荒涼とした遠隔地、カリフォルニア州のマンザナールとチュール・レイク、アリゾナ州のポストントギラ・リバー、ユタ州のトパズ、コロラド州のグ

ラナダワイオミング州のハート・マウンテン、アイダホ州のミニドカ、アーカンサス州のジェロームとローワーなどの10箇所収容所がオープンする。

1942年5月16日 ワシントン大学の学生、ゴードン・ヒラバヤシは、当局に出頭し、憲法上の理由から監禁に対し異議を唱えるべく4ページの陳述書を提出する。

1942年6月3日～6日 ミッドウェイ海戦で連合軍が決定的勝利をあげ、アメリカが戦争において有利になる。

1942年7月12日 拘留されたミツエ・エンドウの弁護士が人身保護礼状を申請する。1944年12月、その事例の判決が、強制収容所の終わりを告げる。

1942年7月27日 ニューメキシコ州のロードバークにある司法省の捕虜収容所から脱走しようとしたとされる2人の男性が衛兵によって銃殺される。その他7人の男性が収容所で衛兵に殺害される。

1943年1月28日 陸軍省は、日系アメリカ人部隊を形成すると表明する。同省は強制収容されていないハワイと本土の強制収容所に監禁されている日系アメリカ人の男性から志願兵を募った。

1943年3月 ハワイから1万人、収容所から1,200人の日系アメリカ人男性が国軍に志願する。

1943年4月13日 ジョン・デウイット大将が、議会で、「どう転んでもジャップはジャップだ。奴らの忠誠心は、信用できない。」と証言する。

1943年6月 最高裁は、ヒラバヤシ訴訟、及びヤスイ訴訟の事例で夜間外出禁止令の合憲性を支持する。

1943年9月 収容所で被収容者に対して行われた欠陥のある「忠誠心アンケート」によって、不忠として指定された被収容者は、トュール・レイクの分離収容所に送検される。

1944年1月 陸軍省は、収容所の被収容者を含む日系アメリカ人男性に徴兵を強要する。圧倒的多数がそれに従うが、数百人は、憲法を根拠に抵抗し、政府から起訴される。

1944年5月10日 ハート・マウンテンで徴兵に抵抗した63人が連邦大陪審で起訴される。6月26日、63人全員が有罪とされ、連邦刑務所での懲役の判決が下される。1947年12月24日、3年の服役後、トウルーマン大統領によって、恩赦される。

1945年1月2日 最高裁がエンドウ事例で忠誠心のある市民は合法的に拘留できないと判決した後、陸軍省は排除法令を廃止すると発表する。

1945年5月7日 ドイツが降伏し、ヨーロッパの戦争が終結する。

1945年8月 44, 000人余りが収容所に残存する。多くが家も仕事も失い、行き場所を無くす。彼らは世間の反日感情を恐れ、立ち去ることを拒ぶ。

1945年8月6日 アメリカが広島に原爆を投下する。3日後、2回目の原爆が長崎に投下される。8月14日日本は、降伏する。

1946年3月20日 最後の戦争強制収容所、チュールレイク分離収容所が閉鎖される。解放された被収容者に対し、25ドルと片道の交通手段が与えられる。帰ってみると、保管したはずの所有物は盗まれ、所有地が破壊されていたという人が何千人もいた。住宅難は深刻化する。

1946年7月15日 トゥルーマン大統領は、日系二世のみで編成された442戦闘部隊をホワイトハウスの庭に招き、「あなた方は、敵のみでなく人種差別とも戦い、そして勝ったのです。」と述べる。この部隊で最大の犠牲者を出し、同規模の部隊では、最高の勲章が与えられた。

1948年 トゥルーマン大統領は、日系アメリカ人の強制収容に対する不服申し立ての議定書に署名する。その結果、およそ3, 800万ドルが支払われるが、これは、収容中に失った収入と所有地の価値を推定すると極一部にすぎなかった。中に失った収入と所有地の価値を推定すると極一部にすぎなかった。

1948年 インドの国家主義者、モハンダス・ガンディーが暗殺される。

1950年 中国部隊がチベットを占領する。

1952年6月 上院と下院がトゥルーマン大統領の拒否権を覆し、ウォルター・マックカレン法案を立法する。この法律で日本は、移民の割り当てが与えられ、日本からの移民がアメリカ市民として帰化できるようになる。

1954年 連邦最高裁は、ブラウン対教育委員会の事例で、日本人を分離することは違憲であると言明した。

1956年 モンテゴメリーのバス・ボイコットをすることでマーティン・ルーサー・キング Jr. 牧師が率いる人種差別に対する闘争が起きる。

1959年 ベトコンのゲリラが、南ベトナム政府を攻撃し、ベトナム戦争が始まる。

1964年 1964年度公民権法により、肌の色、人種、国籍、宗教、性別による差別が禁止される。

1965年 ロサンゼルス郊外のワッツ地区の暴動で、至る所が損壊され、34人の死者が出る。

1965年 中国で文化大革命が始まる。数千人の知識人が迫害される。

1965年 5万以上のアメリカの軍隊がベトナム戦争へ送られる。6ヵ月間に数が2倍になる。

1972年 アメリカが日本へ沖縄を返還する。

1973年 ウォーターゲイト事件が勃発する。翌年1974年にリチャード・ニクソン大統領が辞任する。

1975年 第二次世界大戦中に不当に拘留され、損害を受けたことに対し、連邦政府に補償を求める日系アメリカ人連盟のシアトル強制収用補償委員会が、設立される。

1976年 全米補償委員会が日系アメリカ人連盟の全米会議で設立される。

1976年 アメリカ合衆国が建国200年を祝う。ジェラルド・フォード大統領が大統領命令9066号を廃止する。

1980年 戦時中の一般市民の強制収容委員会が設立され、連邦議会の議員に対し、大統領命令9066号の拘留措置とその合憲性を調査するよう要請する。

1981年 戦時中の一般市民の強制収容委員会が10箇所で意見聴取を行い、750人以上が証人として証言する。

1983年 戦時中の一般市民の強制収容委員会が2月24日、「否定された人的正義」という報告書を発行し、6月16日には、「勧告」という報告書も出した。この「勧告」で大統領命令9066号の下で強制収容された生存者およそ6万人に対し、大統領の謝罪と一人辺りに対し、2万ドルの補償金を求める。

1983年～1988年 ゴードン・ヒラバヤシ、ミノル・ヤスイ、及びフレッド・コレマツ（この3人は、夜間外出禁止令もしくは強制収容に対し抗議したことで有罪となった。）の戦時中の有罪判決が、連邦軍が当時の訴訟で虚実証言をしたという新たに発見された証拠から無効とされる。しかし裁判所は、強制収容が違憲行為であったか否かという判決はしていない。

1988年8月10日 ロナルド・レーガン大統領が、HR442号を法律化する署名をする。それにより、日本人の血統を持つ11万人以上が強制収容されたことは、不当であることを認め、強制収容された被害者全員に対し、謝罪と2万ドルの補償金を支払うことを申し出る。

1989年 中国軍は、北京の天安門で起きた民主化デモを鎮圧する。

1989年 旧東ドイツのベルリンの壁が開放され、冷戦終結を告げる。

1990年10月9日 ワシントンD.C. で、最初の9件の補償金が支払われ、式典が行われる。

## レッスン 1

### 視点の捉え方

第二次世界大戦中にロジャー・シモムラをはじめとする日系アメリカ人が強制収容された事実は、今日に至っても不当なことである。その証拠にアメリカ連邦政府は、強制収容された日系アメリカ人に対して、公式に謝罪し、補償金を支払った。第二次世界大戦当時のアメリカでは、日系アメリカ人が強制収容されたことを不当と見なさない人々もいた。日本が真珠湾を攻撃した後、多くの人々は、西海岸の日系アメリカ人がひそかに日本の手助けをしてアメリカを侵略するかもしれないと恐れた。

日系アメリカ人が恐れられた理由の一つとして、当時のメディアが関係している。第二次世界大戦中は、テレビはまだ普及していなかったため、ほとんどのアメリカ人が新聞やラジオを通して情報を得ていた。確かな証拠がないのにも拘らず、日系アメリカ人はアメリカに対し、忠実ではないという誤った記事や情報がラジオや新聞で多く報道された。以下に当時の記事及びこれに反駁する日本発の記事を紹介する。これらの記事と社説は、真珠湾攻撃のあった翌年に出版されたものである。

それぞれの記事について、以下の質問に答えること。

1. **日系アメリカ人と強制収容についてその記事は、どのような情報を与えているか。**

2. 取材した内容に関し、記者はどのように感じているか。記者の視点はどのようなものか。

3. 記者の視点を説明するのに、どのような表現や言い回しが使われているか。

### ニュース記事

1942年3月2日サンフランシスコ・ニュース紙より

#### 「アーサー・ケイラーの情報の背景」

この記事は、(ウエストブルック) ペグラーの戦争に対する黒人の態度の重要性を明確にした金曜日付けのコラムの補足となるかもしれない。

どのような哲学が関わってしようと、我々の町にいる敵国職員は、日本人と黒人が組み、反白人組織を作り出す機会を逃しているわけではないというのが私の説である。

サンフランシスコにいる日本人と黒人の移民は、緊密に連絡を取り合う関係にある。彼らには共通点がある。サンフランシスコの場合、他の地域と違って白人との肌の色の違いがそれほど目立たない。信頼できる黒人から得た情報によると、このことを利用し、日本人が人種差別的なプロパガンダを流し始めた。

これは、ナチスのようなばかげたプロパガンダではない。黒人は、黒系アーリア人だといっているわけでもない。しかしながら、自分達の経験から、白人と黒人の違いに比べて、黄色人種と黒人の違いは少ないと知るべきだと黒人に巧妙に伝えている。

過去に黒人票を獲得するために共産主義者が使ってきたプロパガンダや、現実に行っている差別という差別を全て利用している。本人は本来穏やかな性格を持つにもかかわらず、アメリカ軍に服役させられ、冷遇されてきたということを黒人に信じ込ませようとしている。

国家に忠実な日系アメリカ人にとって日本問題が大変な悲劇となるかもしれないという時に、日本人工作員が我々の町で紛争を挑発しようとしているのではないかと疑うのは、よからぬことだ。しかし、もしそれを否定したとしても、他に誰が防空壕の目印や、人の生命を救い混乱を防止する為につくられた標識を破壊するであろうか。今こそ日本人スパイが、そのような破壊活動をする時期である。

---

1942年3月5日 サンフランシスコ・ニュース紙

「極悪非道の野蛮行為」東京は、アメリカ政府が西海岸に住む日本人を撤退させたことに激怒。

#### ユナイテッド・プレス

日本のラジオは、今日西海岸に住むアメリカ生まれの7万人の日本人が立ちのくされたことを極悪非道の野蛮行為とし、日本が占領した島に住んでいる住民に対する扱いと比較したコメントを流した。

さらに東京のラジオは続ける。「アメリカ生まれの7万人の日本人が生涯暮らしてきた地域から強制的に追放された。中立の立場をとるオブザーバーは、アメリカ政府や軍の過失により誘発された敵意が加熱し、アメリカ生まれの日本人に対する憲法上の権利が明らかに踏みにじられたと語った。

正真正銘の市民、無力で潔白なマイノリティーを迫害したアメリカ政府の卑劣さは、いわゆる強国であるアメリカが犯した最悪の罪の一つとして歴史に残るであろう。

他のオブザーバーも、植民地の一般市民に対し、細かい配慮と保護とともに全面的な自由を与えている日本の基本的な方針について触れている。

この日本の政策は、日本人としてアメリカで生まれたという致命的な過ち以外に、何の罪も犯していない不幸な市民に対するアメリカ合衆国の極悪非道な扱いとは、著しく異なる。アメリカのエゴイズムは、日系アメリカ人を冷遇することでしか活路を見出せなかったのである。」

---

1942年3月6日 サンフランシスコ・ニュース紙

「オルソン知事、日本人全員に立ち退きを要請  
対策委員会に一部帰省の可能性を示唆」

ユナイテッド・プレス

3月6日ロサンゼルス—オルソン知事は、トーランの議員委員会に今日、カリフォルニア沿岸に住む全ての日本人に立ち退きを指示すると表明。しかし特定の対象者に対しては、帰省の許可が下りる可能性もあるとしている。

オルソン知事は、トーラン下院議員（カリフォルニア州民主党）が代表する委員会の最初の証人である。委員会は日本人の血統をもつ外国人の緊急移動、特に戦略地近辺からの立ち退きについて検討中である。

同知事は、日本人に対する処遇は、ドイツ人やイタリア人とは、区別すべきであると述べた。

オルソン知事は、「アメリカに忠実な日系アメリカ人と日本に忠実な日本人との識別は、極めて困難であり、従ってカリフォルニアの海岸に住む日本人全体を立ち退かせるべきである」と述べた。

ロサンゼルス市長、フレッチャー・ボーロン氏は、証人であるオルソン知事の後に続き、戦時中のFBIの仕事に対して批判的で、それらの責務は、軍の方がより適切に遂行できると述べた。

「FBIは、平時には素晴らしい機関であるが、戦時中になるとそうでもない。」とボーロン市長は語る。更に「FBIと陸海軍の間に十分な連携がない。私の意見では、FBIは、戦時中の問題を軍事的な立場で解決するのにふさわしい政府機関であるとは思えない。」と述べた。



1942年3月7日 サンフランシスコ・ニュース紙

3月7日 ワシントン・カール・ヒンシャー下院議員（カリフォルニア州共和党）は、本日本下院に対し、日本人のハワイでの大攻撃と太平洋岸での破壊行為に備え、西海岸に住む敵国人を退去させるように行政は、速やかに対処すべきであると下院に通告した。

ヒンシャー下院議員は、「日本は、4月15日前後に第2回目の計画を実行するだろうという情報が入った。これにはハワイの大攻撃や、西海岸の破壊活動が含まれ、以降攻撃が続くであろう。」と述べた。

更に同議員は、「もし行政当局が、全ての日本人とその他の敵国人を速やかに退去させるよう対処しなければ、それは大きな過ちとなり、歴史はそれを決して許さないであろう。」と述べた。

---

1942年3月31日 サンフランシスコ・ニュース紙

193人の外国人、主に日本人がシャープ・パーク・キャンプに移動、  
移民局の混雑を緩和

新設の収容所を嚴重警備、危険性の高いグループ、内地のキャンプが開設され 次第移送

昔のサラダ・ビーチの近くで、日曜日になると釣りやスナッフ写真を撮りに来る日本人が多くいたものだ。（日本海軍のために暗礁、潮の流れ、陸標を書きとめていた可能性もある。）多数の日本人が、本日よりシャープ・パークの収容所に移された。193人の外国人で構成され、危険性があるとして全員を一網打尽にし、嚴重な警備の下、シルバーク・ベッドを追加すると、最高600人まで収容できる。

シャープ・パーク・キャンプ・ゴルフ・コースの背後にある峡谷に位置するかつてのキャンプ場のx x xシェルターは、頑丈な鉄条網で覆われている。収容所の周りは、投光照明で照らされ、鉄条網と外部との境界線に衛兵が巡回している。収容所の小屋にバンク・ベッドを追加すると、最高600人まで収容できる。

FBIが武器や、爆発物、信号灯、短波受信機や密輸品の所持、ないしは秘密結社に属するという容疑で拘束する日本人、ドイツ人、イタリア人で移民局が満員となったため、収容所の開設は必要であった。

アメリカ生まれの日本人がそのような品物を所持していることが今夜の午前零時以降に発見された場合は、密輸とみなされる。彼らは、陸軍が許可するまで住んでいる地域から外に出ることを禁止されている。これらの指令は全て公布済みである。

今日ロサンゼルスで陸軍が、港湾地区を破壊行為から守るために 3000 人近くの日本人とアメリカ生まれの子供達に退去を命じた。

それは、ルーズベルト大統領命令により太平洋岸に住む敵国人の処遇を任せられたウエスタン・ディフェンス・コマンドが発した 2 度目の退去命令であった。

まずブレマトン海軍造船所からさほど離れていない、ピュージット湾近郊のベンブリッジ・アイランドに住む 237 人の日本人が対象となり、昨日特別列車でオーエン・バレーのマンザナール一時収容所に移送された。

ウエスタン・ディフェンス・コマンドのジョン・L. デウイット中将は、昨夜声明文を公布し、日本人の血統を持つ外国人と市民は、来週の金曜日、土曜日、日曜日の 3 日間、それぞれ 1000 人ずつ、サンタ・アニタ競馬場の集合センターに集まるよう命じた。

禁止地域は、ロング・ビーチ、サン・ペドロ、ウイルミントン、レドンド・ビーチ、トランス、シグナル・ヒル及び、ハインズなどの市で、太平洋岸とオレンジ郡との間のアルテシア・ブルバード南部ほぼ全地域にまたがる。

それは、造船所や海軍施設、見事なシグナル・ヒルや他の小規模の油田、トランス鉄工所、無数の製造・組み立て工場、ロング・ビーチにある新設のダグラス・エアクラフト工場などのあるロサンゼルスとロング・ビーチ・ハーバー沿いのウォーター・フロントの重要地域である。

リトル東京（日本人街）を離れる。

主に影響を受けた日本人は、農家であり、特に小規模野菜農園のほとんどが重要な設備に隣接している。

更に 2000 人の日本人がロサンゼルスのリトル東京を明日離れ、木曜日にマンザナールに向けて発つ。彼らは、オーエン・バレーにある収容所の準備を手伝う為、以前自発的に出向いた日本人の家族である。

ベンブリッジ・アイランドの住民は、陸軍に護衛されながら、後ろ髪を引かれる思いで出発した。その多くはアメリカ市民であり、この島を離れるのは、初めての経験であった。小さい子供は、ピクニックに行くようにはしゃいだが、大人たちは、涙を流した。

一行は登録後、指紋をとり、名札をつけ、フェリーに乗って、シアトルまで行き、そこから特別列車に乗った。彼らは最後の最後まで、えんどう豆や苺などの作物の収穫をした。

彼らは、生活必需品のみを持ち去り、日本人協会が所有していた 50 ガロンの苺ジャムや 68 枚のレスリング・マットなどは、公民館に残した。

## 個人体験：トク・シモムラの日記

以下は、ロジャー・シモムラ氏の祖母（トク・シモムラ）による真珠湾攻撃後の日記から抜粋である。文章を読み、質問に答えるよう、学習者に指導する。

1. シモムラ夫人は、日米間の戦争についてどのように感じているか。
2. シモムラ夫人は、日本に対して忠実だと思うか。新聞記者が恐れていたようにアメリカの敵国である日本を支援したいと思っているか。またその理由となる箇所を述べよ。
3. シモムラ夫人が一番望んでいることは何か。
4. シモムラ夫人の日記と上記の新聞記事を、どのように比較するか。どのようなところが似ているか。またどのようなところが違っているか。
5. 新聞記事は、シモムラ夫人の日記よりも信頼性、または信憑性があると思うか。思うと答えた人は、その理由を述べること。また思わないと答えた人も、どうして思わないのかその理由を述べること。

1941年12月7日

**今日私が、教会から帰ると、日本の戦闘機がハワイを爆撃したと言う、まるで夢でも見ているかのようなニュースが舞い込んで来ました。信じられないほどのショックを受け、その日は一日中ラジオの前に座って、ニュースを聞いておりました。日本が午前6時にアメリカに対し、宣戦布告をしたと伝えました。私達の将来が突如として、暗くなりました。私は、神に我々を守ってくださるようにとお祈りしました。**

1942年2月3日

のびのびにしていた指紋登録を今日になってやっとしました。佐々木さんと私は指定された9時に郵便局にいきました。厳正な登録は2時間かかりました。気がかりになっていたことをようやく終えることができました。

1942年4月18日

今日、日本人街の殆どの店が閉鎖されました。我々の40年の地域社会は、深遠な終わりを遂げたのです。これまでの思い出すと涙が流れてきます。高血圧が再発し、2度目の注射を受けました。私は、ベッドに横たわり、将来のことを考えながら、不安な気持ちで一杯になりました。

1942年5月21日

今日は曇り時々晴れの日でした。今日は、夜シャワーを浴びました。今日は一日好天気となりました。早朝の洗濯場は、まるで戦場のように入り混じっていました。いつものよ

うに一日の殆どを掃除と洗濯で過ごしました。昼食にウインナーが出され、夕食には、いつものポローニャが出ました。食欲が余りありません。

1942年12月7日

今日でアメリカと日本の戦争が始まってちょうど一年がたちました。2つの国の価値観を持つ私達は、一日でも早く平和が訪れることを祈ります。

1943年1月29日

今日も雪が降りました。夜はとても静かでした。今日号外の新聞が出版されました。それによると、アメリカ国に対する忠誠心を証明するためには、日系二世の入隊を許可し、自己を犠牲にすべきであると書かれていました。私は、そのことと子供を戦場にする親たちにとって、どれだけ戦争の影響が深く関わっているかを、一日中考えていました。一日でも早く平和が戻りますように私達皆祈らなければ、なりません。

### 自叙伝：日系二世の娘

モニカ・ソネ氏の著書、日系二世の娘では、第二次世界大戦中の日系アメリカ人の強制収容を別の観点で表している。教師用ガイドに抜粋されている「ハーモニー収容所での生活」というタイトルの章を読み、以下の質問に答えるよう学習者に指導する。

1. ソネ氏は、収容所に送られた家族の経験についてどのように述べているか。
2. それは、ソネ氏と家族にどのような影響を与えたか。
3. ソネ氏の体験は、トク・シモムラ氏の体験とどのように対比されるか。どのようなところが似ているか。どのようなところが違っているか。その理由を述べよ。
4. モニカ・ソネ氏と家族の実際の経験は、新聞記者が提供した情報と比べてどうか。
6. ソネ氏の著書からの抜粋は、ここに紹介されている他の文書（新聞記事や日記）より信頼性があると思うか。それともないと思うか。その理由も述べよ。

## 芸術的解釈：「アメリカン・ダイアリー」の絵

ロジャー・シモムラ氏は、祖母の日記と共にその作品を通して日系アメリカ人の強制収容のことを伝えてきた。ホーム・ページ、「In the Shadow of My Countryー祖国の影で」の「アメリカン・ダイアリー」の作品のシリーズを一覧するよう学習者に指導する。作品の中で伝えようとしている情報に焦点を置く。同アーティストは、言葉ではなく、主に絵を通して強制収容の経験を伝えてきた。以下の質問に答えるよう学習者に指導する。

1. ロジャー・シモムラ氏は、戦前と戦中の日系アメリカ人の経験に関して、どのような情報を伝えているか。
2. シモムラ氏は、その情報についてどのように感じているか。またどのようにそれを伝えているか。
3. 新聞記事に記載されている強制収容と比較するとシモムラ氏の情報はどのようなところが似ているか。またどのようなところが違うか。
4. ソネ氏の「日系二世の娘」と比較するとシモムラ氏の情報はどのようなところが似ているか。またどのようなところが違うか。

---

## 共感すること

新聞に記載された記事からも分かるように、新聞を通して情報やものの見方を得ていた人々は、アメリカ西海岸に住む日系アメリカ人に対し、深刻な懸念を抱いていた事は明らかである。ジャーナリストの主張を裏づける信憑性のある証拠は何もなかったが、それらの記事が12万人ほどの潔白な人々を投獄に追い込んだ要因の一つであるのは事実である。強制収容の要因についての更に詳しい情報は、Denshoの学習用ウェブサイト、[www.densho.org](http://www.densho.org)を参照のこと。

戦後我々は、日系アメリカ人の大量立ち退きと強制収容に関するより正確な情報を得た。その結果、第二次世界大戦中に何がおきたのか、よりよく理解できるようになった。ロジャー・シモムラ氏の絵や同氏の祖母の日記、モニカ・ソネ氏の著書、「日系二世の娘」、Denshoのウェブサイトに記載されている証言の数々、アメリカ連邦政府が独自に出した証拠などにより、戦時中に報道されたことは、事実と反していたということが明らかになった。過去を振り返ると、12万人もの人々が、日本人を祖先に持つという理由だけで公正な権利が与えられなかったことがわかる。アメリカ連邦政府は、公式に1988年に市民権法を通過させることによって、その事実を認めた。この不当行為を過去の不幸な過ちとして認め、二度と繰り返さないための教訓となった。しかしながら、アメ

リカが、60年前に学んだはずの教訓を有効に生かしていないという証拠が集まりつつある。

特定の祖先をもつという理由だけで無実の人々が強制収容されたことを振り返り、何故そのようなことになってしまったのかと問いかける。それは、明らかに過ちであり、二度と繰り返してはならないことだ。しかし、今のこの瞬間にも特定の出身国を持つという理由だけで、監視され、何の罪も犯していないのにも拘らず刑務所で拘束されている人々がいる。それはある意味で、1940年代に日系アメリカ人が経験したことからほとんど何も学んでいないといえるだろう。

## レッスン概要

このレッスンを通して学習者は、世界で起きる出来事を見聞きする上で、偏見とものを見る視点がどのような役割を果たすかを理解し、違う視点で世界の問題を考えるようになる。様々な情報源から集めた情報を比較し、現在の問題を客観的に捉えることができるようになる。

レッスンのステップは、以下の通り。

1. 世界や、国内、または身近で現在起きている出来事について、何を知っているか学習者に聞く。（例：テロ対策法\*は、第二次世界大戦中に人種と民族を理由に強制収容された日系アメリカ人と、現在同じ理由で拘束されている人々に関連している。）現在問題になっているニュースの中で日系アメリカ人の強制収容と関連した事件で、教師や学習者が興味のある重要な事件を選ぶ。その状況の歴史的背景について何を知っているか学習者に聞き、この現在の状況の原因を特定し、歴史的背景を通し、現在の状況がどのように理解されているかを認識できるように指導する。その事件に関して学習者がどんな疑問を持っているかを説明するよう指導する。

\* テロ対策法—通称「Patriot Act」愛国者法

2001年10月にブッシュ大統領が署名、テロ対策として成立した法律でケーブルテレビ・プライバシー法および、合衆国法典第18編第2703条を修正し、捜査当局による盗聴活動の権限を拡大した。

2. 学習者にどのように情報を得たかを問いかける。情報源は何か。何故その情報源が信頼できるかなど。

3. 次に3人ずつのグループに分け、現在起きている事件や問題に関する記事を読ませ、記者の主要ポイントの要点を書かせる。通常の教室で9つから10つのグループができ、それぞれの視点を発表することによって、その事件や問題を広範囲に渡る視点から考えるという体験ができる。まず学習者は、記事の紹介をする。この段階では解釈や疑問を入れず、単に記者がその記事の中で何を伝えているかを説明させる。次に、記者の意見の根拠となる証拠を特定させ、学習者はその記事に対する疑問や感想を述べながら、そ

の記事はすでに彼らが知って、あるいは信じている事柄を追認する記事か、またはそれに反する記事かを発表させる。

政治的な内容の記事を調べているかどうかを確認する。下記のリスト（あるいは自分の持っているリスト）から記事を選ぶことができる。学習者に記事を探させてもよい。もし、後者の方法を選ぶ場合は、その記事があらゆる領域を網羅していることを確認すること。

グループが互いに意見交換をできるように時間配分をする。

4. クラス全体で、各記事の情報源からの主要なポイントを図に表す。どのポイントで情報源の意見が一致するか、またはしないか。これらの記事は事実の前後関係や、歴史を明確に提示しているか。学習者はそれに対して同意するか。集められた記事の中で、最も不明確な点は何か。更に詳しい情報を得るためにはどの分野を調べるのか。どこでそれらの点を調べられるか。

5. 締めくくりのディスカッションを指導する。ニュースとして読んだり聞いたりする時、その様々な解釈が典型的なものか、独特なものかを考えさせる。そしてその様々な見解や報道は、調査した話題に特定されたものか、それともなんらかの“規則”に則ったものか。その記事の中で意見や解釈が今まで聞いたことのないものばかりであるのは何故か。それは、間違っているということの意味なのか。情報の信頼性と正確性はどのように判断するのか。主流のメディアが偏った情報しかない流さない場合、どのようにすれば世界の問題を把握できるか。世界中で何が起きているかを常に把握するためにはどうすればよいのか。そうすることは何故重要なのか（あるいは重要であるかどうか）を考えさせる。

6. クラスに年間を通して、最新の出来事を調査する方法を生み出すよう指導する。例えば、定期的に毎週または、毎月指導し、ニュースで重要な課題を随時取り上げる。

## レッスン 2

### ロジャー・シモムラ氏の作品におけるビジュアル・コミュニケーションとそのテーマ

ロジャー・シモムラ氏は、ビジュアル・アーティストとして、言葉ではなく絵を通してメッセージを伝える。1940年代に日系アメリカ人に何が起きたのかを人々に知ってもらう為に、作品”An American Diary”を通して人々に歴史を伝えたいと語る。

#### テーマ

以下は、シモムラ氏が最も関心をもつ事柄として、挙げたテーマである。

**不法行為：**日系アメリカ人は、何の証拠もないまま無実の罪に問われた。法廷で立証する機会も与えられなかった。住みなれた家と日常生活を手放すよう強制され、何年間も拘置されたのである。（1942年4月21日、1942年4月28日とタイトルを付けられた作品を参照）

**人種差別：**連邦政府の役人は、アメリカ合衆国に忠実な日本人とそうでない日本人の区別がつかないと主張し、人種偏見から約120,000人の日系アメリカ人を強制収容した。強制収容されなかったドイツ系アメリカ人やイタリア系アメリカ人に対しては、忠実であるかそうでないか見分けがついたというのだろうか。（1942年2月3日、1942年10月31日とタイトルを付けられた作品を参照）

**文化の衝突：**日本人移民の親を持つアメリカ生まれの子供達は、文化の不一致を経験していた。日本文化と主流の白人アメリカ文化との溝は、世界観や生活観において、非常に深かった。（1942年5月21日、1942年12月7日とタイトルをつけられた作品を参照）

**文化の同化：**日系アメリカ人は、アメリカ文化の主流である白人文化に同化すべきか、日本文化を維持すべきかの選択に苦しんだ。これは、特に世代間の問題であった。アメリカ生まれの子供たちは、“アメリカ”文化により近かったが、親や祖父母は自分たちの育った日本文化に慣れ親しんでいた。（1942年12月12日、1942年12月25日とタイトルをつけられた作品を参照）

**退屈な収容生活：**収容生活は、極度の虚無感と倦怠感に支配された。それまで人生を精一杯有意義に生きてきた人々にとり、無意味な時間を過ごす事は苦痛であった。（1942年10月16日、1943年8月14日とタイトルをつけられた作品を参照）

**歴史の皮肉：**この第二次世界大戦中の強制収容は、国民の自由を守るべき立場の政府が、加害者となった。アメリカ合衆国の法律や独立宣言は、言論、思想の自由並びに、生き



方を選ぶ自由、幸福を追求する権利を保障している。しかしこの強制収容においては、アメリカ連邦政府が監獄の看守、国家統制主義者として行動した。（1942年2月3日、1941年12月12日とタイトルを付けられた作品を参照）

### 学習者の課題

上記リストの説明または、強調しているテーマは、どの作品に当てはまるか選ぶ。例として、特定のテーマを持つ作品が紹介されており、学習者と一緒にそれらの作品を選択するか、または学習者に選択させてもよい。学習者は、ここで紹介されている例とは違う作品をリストから選ぶかもしれない。

このレッスンでは、学習者個人または、小グループに分かれる前に、クラス全体で一、二度練習することを強く推薦する。

学習者が何故その作品を選択したか理由付けをするよう指導する。

## レッスン 3

### シンボルとイメージ

第二次世界大戦中に強制収容された日系アメリカ人を描いたロジャー・シモムラの作品は、人種を理由に標的となり、駆り集められ、監禁されたという不当性をテーマにしている。“An American Diary”では、日系アメリカ人が自分たちの国や、家、友人、日常生活から引き離されたことを象徴するためにシンボルやイメージを使っている。作品の多くは、この決裂を平行線で表し、特に横線を使って描写している。この横線は収容所の鉄条網と、それ以前の生活からの強制的な隔離を象徴している。

1942年8月17日の作品では、このシンボルとなる線を明確に表している。作品の中で鉄条網の線が描かれ、収容所の外との境界を象徴している。外の世界から隔離された鉄条網の反対側は、日系アメリカ人が収監された収容所の掘っ立て小屋と監視塔である。

ウェブサイトの作品を学習者に紹介し、アーティストが第二次世界大戦中の日系アメリカ人強制収容を強調する為に使っている線（特に横線）の例を学習者に探させる。鉄条網を表す線のように明確なものもあるが、中には建物の煉瓦や窓の線や他の図形的要素として使用されている線もある。

この課題は、学習者個人でも、小グループでさせてもよい。30点の作品を見て、互いに意見交換をする時間を与える。

### 続き

この課題は、シモムラ氏が使っている他のシンボルについても応用できる。配色に焦点を絞ってもよい。（特に強烈な黄色で描かれている空など）アーティストがその色を選んだ理由は何か？コミックのキャラクター、ディック・トレイシーやスーパーマンが作品の中に何故登場するのか？何故それらのイメージをアーティストは使うのか？強制収容について、彼は何を言おうとしているか？当時のアメリカについては？国に対して常に変わらない忠誠心を持っていた日系アメリカ人を監禁した政府に対し、何を言おうとしているか？他に強いメッセージや感情を表すシンボルを探す。

## 日系アメリカ人の強制収容

第二次世界大戦前、アメリカに移民した日本人は、過酷な人種偏見と差別に耐えなければならず、アメリカ社会で苦勞しながら、その地位を築き上げていった。1941年に日本が真珠湾を攻撃すると、それに恐れたアメリカ人は、「証明されるまで無実である。」という民主主義の原則を忘れてしまった。連邦司法長官は全ての日系アメリカ人を拘留することは、法律に違反すると述べ、さらに海軍やFBI、他の政府捜査当局も、フランクリン・ルーズベルト大統領に日系アメリカ人は、国家安全に悪影響はないと伝えた。しかし、半日家のロビイスト（議案院外陳情者）や、政治家、軍司令官は、日本人の血統を持つものは誰でも信用ならないと主張した。その結果、12万人の男女、子供、（その内、3分の2はアメリカ市民であった。）が日本人と言う理由だけで自由を失ったのである。

1942年2月19日 ルーズベルト大統領は、大統領命令9066号に署名し、西海岸に住む全ての日系アメリカ人を撤去させる権限を陸軍に与えた。数ヵ月後には、日系アメリカ人家族は、荷物をまとめ、集合場所に集まるようにという命令の張り紙が張り出された。どこに行くのか、期間はどの位なのか誰も知らされなかった。親達は、出発まで数日間という短い猶予期間に、家も仕事も二束三文の値で手放すことを強要された。学生達は、学校をやめ、飼っていたペットも手放さなければならなかった。番号札を付けさせられ、数千世帯が、駅やバス・ターミナルに到着した。バスや列車に乗り込むと、武装した衛兵に、窓のブラインドを閉めるよう命令された彼らは、今後何が起こるのか見当もつかなかった。

政府によって、自らの家から撤退するよう強要された日系アメリカ人は、何ヶ月も生活しなければならない場所を目の辺りにし、更に衝撃を受けた。収容キャンプ場は、西海岸から遠く離れた内陸部にあり、まだ建設中であったため、強制撤去させられた家族達は、「集合所」と呼ばれる仮の拘留施設に入れられた。もともと人間が住む場所ではない、競技場や催事会場などが住居となった。それぞれの家族は、天井まで届かない壁一つで仕切られただけの狭いバロックの部屋が与えられた。通常は馬や豚などの家畜のいる馬小屋で、藁のベッドに寝るという生活が強いられた。軍隊式の食堂で全員が食事をしなければならず、バストイレも列に並んで使う共用のものであった。しかし、最も耐え難い屈辱的なことは、収容キャンプ場が、鉄条網のフェンスで囲まれ、望楼から衛兵が監視していたことであった。日系アメリカ人は、囚人にされてしまったのである。

強制撤去させられた日系アメリカ人家族は、このような事態でも最善を尽くした。廃材を集めて家具を作り、毛布を吊るして、部屋の仕切りにした。野球チームを作り、収容キャンプ場を走るようにした。やっと鉄条網が張り巡らされた生活も慣れたころ、政府は、再度彼らをそれぞれ10箇所の永続的な収容キャンプ場に移動させた。今度は、アリゾナ州の砂漠地帯や、アーカンソー州の沼地などの荒涼たる不毛地帯であった。周りは荒涼として、過酷なものであった。そこでの暮らしも、仮収容キャンプ場と同様ひど

いものであった。1942年の秋までに、日系アメリカ人全員が、一般市民用の囚人キャンプ場に移転させられた。政府当局は、これらの場所を強制疎開センター（リロケーション・センター）というやわらかい用語を使い、ルーズベルト大統領自身は、強制収容所と呼んでいた。連邦当局と武装した衛兵の影で、日系アメリカ人は普通の生活を送ろうと努力した。

収容所での作られた地域社会でも赤ちゃんが生まれ、老人が死んでいった。10代の少年少女は、食堂でのダンスパーティで浮ついた。何カ月も経ち、日系アメリカ人は、鉄条網の中で7月4日の独立記念日と12月のクリスマスを祝った。非収容者達は、コック、教師、医者、牧師、新聞記者など収容所の外部にあるような職に就き、ごくわずかな賃金で衣類や生活必需品を買った。しかし、賃金は、余りにも低く、家賃が払えなくなった数千世帯が家や、農場、仕事を失った。被収容者達は、選挙を行って、自ら統治していた。連邦当局は、郵便物の検閲や、カメラのような違反物はないか部屋を捜査する権限を持っていた。食事から洗濯まで全て共同作業で、プライバシーなど全くなく、家族の絆も次第に薄れていった。子供は友人と家出をして遊びほうけ、親は、不透明な未来に不安を抱いた。

拘留生活が始まって1年後、若い日系アメリカ人は、深刻な決断に迫られた。1943年2月、政府は、日系人に対し軍務に志願するよう要請した。拘置された両親を後に残すのは、心配であったが、1000人以上の男性が、日系人のアメリカに対する愛国心を証明するために、彼らを信用せず、監禁した国のために志願兵となり、戦うことを決意した。人種差別的分離された第442号戦闘部隊は、ヨーロッパ前線で勇敢に戦い、最大の犠牲者を出した。戦後、部隊の規模では、最高の勲章が与えられた。1944年政府は、収容キャンプ場の日系アメリカ人を徴兵招集し始めた。数百人は、政府が憲法上の権利を戻し、自由にするまで徴兵招集を拒んだ。その行動によって、彼らは、刑務所で服役することになった。

1944年12月の最高裁の訴訟が収容キャンプ場の門を開いた。中には、早くから、仕事や大学進学のため、収容キャンプ場を出ることを許可された者もいたが、ついに政府は、全員に対し、新居地で再出発するよう促した。片道分の交通手段と一人当たりわずか25ドルを支給され、新たな人生のやり直しをしなければならなかった。日系アメリカ人は、再出発する手がかりもないまま、キャンプ場の外部でどのような扱いを受けるとかを恐れていた。家も仕事も亡くし、行き場のない者がほとんどであった。留守中、農地や仕事を管理すると約束していた者に略奪された日系アメリカ人が数え切れないほどいた。こうして開放された日系アメリカ人は、前途多難な人生の再出発をしたのである。数十年後、連邦議会は、日系アメリカ人の大量監禁は、軍事上の必要性からではなく、人種差別、戦争異常心理、リーダーシップの欠如であるという結論を下した。1988年、連邦政府は、第二次世界大戦中の日系アメリカ人に対する不当な扱いを認め、謝罪と保証金の支払いをした。

これは、モニカ・ソネ著書の「日系二世の娘」の」から抜粋した一章である。ソネ氏は、カズコ・イトイとして生まれ、日本から移民した同氏の両親は、シアトルでホテルを営んでいた。一世の親を持ち、二世としてシアトルで生まれたソネ氏は、アメリカ人として、また同時に日本人の親から日本文化の影響も受けながら育った。家族でお弁当にアメリカ式のフライド・チキンと日本式の寿司を持ってピクニックに行き、ミッキーマウス・クラブと仏教徒のダンス・パーティに出かけた。しかし、真珠湾攻撃後、イトイ家と日本人の血統を持つ人々にとって、人生は大きく変わった。

## 9章

### ハーモニー収容所での生活

ディ・ウィット大將は、「避難の日は、間近だ。与えられた時間以内に全てを用意せよ。」とその退去令を幾度となく通告した。

父は、ベントリー・エイジェント・アンド・カンパニーに父の会社を管理するよう、交渉した。それ以前に父がビル経営者と管理会社とで長期のリース契約を結んでいたため、強制撤退しても、会社を手放さずにすんだが、これは、稀なケースであった。

母は、箱を集めては、生涯かけて、溜めて来家中の衣類やおもちゃ、家財道具などを夜な夜なに整理し始めた。私達は、古いトランクやスーツケースを引っ掻き回しながら、何故こんなことをしなければならないか、一瞬忘れてしまうほど、昔の思い出に浸って、楽しんだものだった。

大將は、「日系人全員が至急チフスの予防接種をし、医者からの署名を証拠として示すカードを持ち歩くようにせよ。」と拙速に荒々しく命令を下し始めた。

瞬く間に、私達日系人は、ジャクソン・ストリートにある日本人商工会議所の建物に集まり、その薄暗い廊下に静かに長蛇の列をつくって並び、医師の診察を待っていた。医師の妻は、まだ若く美しかったが、多くの日本人たちの予防接種をする夫の手伝いに、疲れ果てている様子であった。

4月21日火曜日、大將は、「シアトルにいる日本人全員は5月1日までに、ピュアラップに移動せよ。土曜日と日曜日の午前8時から午後5時まで登録をし、3つのグループに別れ、それぞれ火曜日、木曜日、金曜日に出発するものとする。」と通告した。

それまで、私達は、何らかの形で救ってもらえると、万に一つの望みにすがっていた。しかしもう泣き言を言っている場合ではなかった。1週間以内に何もかも全て、手配し

なければならなかった。風で吹き飛ばされるマッチのように1週間はあわただしく過ぎていった。母は、シーツや、枕カバー、毛布を分け、それを私達は、セーラーバッグに詰めた。冬用の厚手のコート、セーター、ウールのズボンやスカート、ネル地のパジャマやスカーフをスーツケース2つに詰め込んだ。洗面用具とすず製の皿とカップに、ナイフ、フォークでスーツケースは、一杯になった。このセーラーバッグ一つとスーツケース二つに詰めた荷物は、私たちのこれからの生活のバックボーンであり、慎重に荷造りをしなければならなかった。

ヘンリーが、家族登録のため、コントロール・ステーションへ行った。ヘンリーは、10710という番号札を20個、家に持って帰ってきた。その番号札は、カバンと私たちが身につけるコートにつけるもので、以降、私たち家族は10710番として呼ばれるようになったのである。

出発前の最後の日曜日にヘンリーと父が家の家具全てを経営するホテルの一室に収納した。行政管轄の倉庫や教会の地下室に收容期間中は、荷物を置いてもよかったが、サム、ピーター、ジョーの3人が管理してくれる自分たちの場所のほうが安全だと思ったのである。

月曜日の夜、友人が訪ねてきたが、空っぽになった家の床は、話し声や足音がこだまするほど閑散としていた。木箱に座って、コーラをビンごと飲みながら、これから始まる開拓生活について語り合った。ヘンリーとミニーは、リビング・ルームの片隅でその夜はずっと手を握り合っていた。ミニーは日本人コミュニティーのはずれに住んでおり、その地域は、最後の第三グループとして出発することになっていた。

その夜、私達は、何も敷物のない床に寄り添って、軍用毛布に包まって寝た。次の朝、ヘンリーは、大声で、「6時半だ。皆おきろ！とうとうその日が来たんだぞ！」と怒鳴って、私たちを現実に戻した。

私は「もっと、明るくできないの？」と叫んだ。

「どうしようもないだろう。泣きわめけとでもいうのかい？」

朝起きると、床に寝た私達は、体が痛くなって、しきりに体操をして、しびれた背中や手足を揉んだ。私達は、細長いセーラーバッグに毛布を詰め込み、白い厚紙に書かれた10710の番号札を、身にまとったコートにしっかりと付けた。バスルームに行き、鏡をふと見ると涙がとめどなく流れた。この快適なバスルームに立ってられるのが最後だから、泣いていたのではなく、鏡に映った自分が日本人と熊の子のように見えたからである。東洋人の髪を扱ったことのない人にかけてもらったパーマが、ひどかったのである。まるでこげたマットレスの綿のようになってしまい、くしとブラシでとくとさらにひどくなって恐ろしいマッシュルームのようになってしまった。この朝だけは

きちんとしたヘアスタイルで、威厳を持ってふるさとを離れるつもりでいたのに、ひどいことになってしまった。スカーフで頭を隠すしか方法はなかった。

一階で私達は台所の料理用ストーブの周りに立ち、母が簡単にコーヒーとスイート・ロール、ゆで卵を作ってくれた。すず製のカップと皿を使ったが、ゆで卵はその皿の上で音を立ててころがった。ヘンリーは、「今までのように仰々しいナプキンを使って、堅苦しいマナーに従わなくてもいいんだな。食べる時も素手で食べたほうが、かえっておいしいかもしれないよ。」と逆にこの質素なスタイルを気に入っている様子であった。

母は、「私がいる間は、そんなことはさせません。」と顔をしかめてきつく言った。

ベルが鳴ったので、ドアを開けると、ダックス・オシマであった。ダックスは、借りてきたトラックで8番街とレーン通りにあるホテルまで私たちと荷物を運んでくれることになっていた。イトイ家の男たちは、残った家財道具を急いでトラックに積み込んだ。ダックスが1ガロンの醤油缶を見て、「これもホテルに持って行くんですか。」と不思議そうに尋ねた。

どこへ持っていくのか、またどうしてそこにあるのかさえ、誰も見当もつかなかったが、とうとう母が、「あとう。それは、私が持っていくつもりなの。これから行くところには醤油はないと思うから。」と恥ずかしそうに言った。

非常に驚いた顔をして、ヘンリーは、「お母さん、セーラー・バグーつにスーツケース2つしかもって行っちゃいけないと決められているじゃないか。持って行きたいものは他にも沢山あるのに、どうして醤油なの？」と聞いた。

私は、とても恥ずかしくて「みんなに笑われちゃうよ。ピクニックに行くんじゃないんだから！」と母に言った。

しかし、母は、「お黙りなさい。こんな小さいものは誰も気づいたりしないはずですよ。お酒を持っていくわけではないんですから。」と断固としてあきらめようとしなかった。

15年前に買ったラジオは、ホテルに運ぶはずだったが、私はそれを箱から引き出して、「じゃあ、お母さんが醤油を持っていくんだったら、私はラジオを持っていくわ。これで独り言を言わなくてもよさそうよ。」

スミは、考え事をしていたかと思うと、箱の中をあさり始めた。するとヘンリーが怒鳴って言った。「いいかげんにしろ！スーツケース二つにセーラーバグーつしか、持って行ってはいけないんだ。例外は認められないんだ。家ごと持ち出さないうちに早く出発しよう。」

母は、それでも醤油を持っていくことをあきらめきれず自分の荷物に詰めた。出掛けにもう一度茶色と黄色で縁取られた家を見て、「我が家よ。さようなら。」と明るくつぶやいた。

年老いた犬のアズマが尻尾を振りながら庭にやってきた。「さようなら、アズマ。我が家をよろしくおねがいしますよ。」と母は言って、別れを告げた。

「あー、そうそう。お母さんツバメ、あなたにもさようなら。家族仲良く暮らしてね。」と軒から飛んできた一羽のツバメにも言った。

母は、スミの寝室の窓際の軒の下に小さいツバメの巣があって、その巣には宝石のようにきれいな青色の斑点のついた卵が4つ入っていたと説明してくれた。そのツバメは、まるで小さい戦闘機のようにアズマの真上すれすれに飛んで行った。私達は、そのツバメが何度も何度もアズマを目掛けて飛んでくるのを見て、驚いた。母は、「お母さんツバメが、家族を守ろうとしているのよ。」と教えてくれた。アズマは、飛び跳ねながら迷惑そうにその鳥をあしらっては、母のウールのズボンに頭をこすり付けていた。

ダンクスが、8時15分前ですよと親切に教えてくれた。私達は、一人ずつアズマの毛を撫ぜながら別れの挨拶をした。こんどからこの家に住むことになった家族が、アズマを飼ってくれると約束してくれていたのだ。

私達は、トラックに乗り込み、勇気あるツバメのことを話していた。見納めとなるビーコン・ヒルの橋を降りるにつれ、しんみりとなり、ピュージット湾に見えるかすかな朝焼けを見つめていた。にぎやかなチャイナ・タウンを通り過ぎてまもなくすると8番街とレーン通りの角に着いた。今までこの場所は、人気のない閑散とした場所であったが、次第にセーラーバッグとスーツケースを持つ、名札をつけた日本人で一杯になり、皆不安げに立っていた。

誰もこれからどこに行くかわからなかったが、皆カジュアルな服装をしていた。中には、厚手のマッキーノの上着にハイキング用のくさび止め付の靴を履いていた一世の男性もいた。またスキーウエアを身にまとったスタイルのいい素敵な新婚さんらしきカップルもいて、私はしばし見とれていた。二人は、手をつないで立っており、最新の真新しい荷物が二人によく似合って新婚さんらしさをかもし出していた。悲遇にあきらめ気分が漂う中、ダークカラーの裾を深く折り曲げたズボンを着て、お構いなしという一世の女性が何人かいた。一人の年老いた女性は、足首までとどく黒のクレープ・ドレスを着ていて、首のところにSのイニシャルのピンをつけていた。流行おくれのデザインであったが、上品で、女性らしい服装であった。

車が次々と到着しては、荷物を持った日本人が降りてきた。10時になって、グレーハウンド・バスの先陣が音を立てながら、カーブに沿って並んで駐車すると、人ごみは、



騒がしくなった。それぞれのバスのドアが開き、そこから出てきたライフル銃を持った衛兵がドアのそばに厳格な面持ちで立った。するとそれまで騒がしかった人ごみは、急に静かになった。ライフル銃を初めて目の前にして、とても不安になった。反乱を抑えるためであったが、逆にそのライフルを見て、大胆な気持ちになってしまった。

日系アメリカ市民リーグのリーダーの一人、ジム・シゲノが、前のほうに颯爽と出て、一番目のバスに乗る家族の番号を読み始めた。私たち家族の番号も呼ばれ、人ごみの中を掻き分けて急いでバスの方向へ向かった。「さあ、乗ってください。」あまりに緊張してあわてていたのでぶつかり合いながら、バスに乗り込んだ。恐る恐る衛兵とライフルを見ると、まだ赤い頬をした若い青年であったので驚いた。澄んだグレー色の目は、無表情で前方を見つめていた。私たちが不安で緊張していたのと同じように、彼にとってもそうであったにちがいない。ヘンリーは、窓際のシートを押さえ、見送りをしてくれるはずになっていた、ミニーを探していた。スミと私は、突然親を守って上げなければならぬような落ち着かない気持ちになり、父と母の安否を確かめた。二人は黙ったままであった。

新聞記者が人ごみの中でせわしく動き回ってフラッシュ付きのカメラで写真を撮っていた。一人の記者は、バスの中に入り込み、小さい男の子のいる若夫婦に写真をとるからバスから降りるようにと頼んでいた。その若夫婦は気が進まなかったが、あまりにしつこく頼むので、ついに仕方なくバスから降りて、恥ずかしさをこらえながら写真の前で笑ってポーズをとった。数日後、その写真は、新聞に記載され、見出しに「退去命令に素直に従うジャップ」と書いてあった。

私たちが乗ったバスは、瞬く間に一杯になり、全員がまっすぐに前を見て、出発を待っていた。衛兵がバスに乗り込み、ドア側に座って、グレー色のユニフォームを着たバスの運転に軽く合図をした。低い音とともにドアが閉まり、私達はとうとう戦時における政府の市民統制の虜となった。

日系人第一班が揃うと、ゆっくりとバスが進み始めた。私達は、バスの窓から外を見て、近日中に出発することになっている友人たちに軽く手を振った。日本人に混じって、背の高いすらりとした、日系バプテスト教会のエベレット・トンプソン牧師とエマリ・アンドリュー牧師がいた。二人は、我々の古くからの知り合いで長年の付き合いがあった。二人ともまるで私たちを元気付けるかのような明るい笑顔で大きく手を振っていた。日系人社会で信頼の高かったベリー・ガザート・グラマー・スクールの校長のマホン氏だけは、静かに見送る日本人の前に立ち、涙を流していた。

車を運転してきたミニーをスミが見つけた。急ブレーキをふんであわてて車から降りて、ヘンリーを必死になって探していた。ヘンリーは窓を開けて、「ミニー、ミニー、ここだよ！」と叫んだ。そこにいた人々が、親切にもミニーをバスまで案内してくれた。ミニーは、バスの窓のところまで来て、「ヘンリー、遅くなってごめんなさい。あなたに

お花を持ってきたの。」息せき切って言って、黄色いラップサイセンを手を伸ばして差し出した。「ありがとう。後で会おうね。」とヘンリーも叫んで言った。

バスが角を曲がり、微笑んで手を振る必要もなくなると、私達は、重々しい気持ちで席に着いた。誰もが静かにしていたが、にぎやかに話をしていた大学生だけは、例外ですぐに校歌を歌い始めた。中には、彼らをにらみ付ける人もいたが、結果的には、歌う声が更に大きくなっていった。突然きりさくような赤ん坊のかん高い泣き声が聞こえた。大学生達はすぐに後ろめたそうに歌うのをやめた。私達の席から3列後ろに、若い母親が顔を真っ赤にして泣きわめく赤ん坊を上下に揺すりながら座っていた。その怒った小さな顔はキモノやセーター、毛布などに何重にも包まれていたが、毛布に白い名札がつけられていた。若い男が 憤った顔つきの母親にどもりながら謝った。母親はショッピングバッグの中に ある哺乳瓶を怒った手つきで探し、彼女がそれを見つけた時は、我々も胸を撫で下ろした。

私達を乗せたバスは、急いで街を出て南方へ向かい、途中、新しく開拓された広大な黒い土壌の農地が見えてきた。始めは、道路際をとぼとぼ歩く筋肉の発達した馬や、光沢のある銅色をした牛の群れ、牧草の鮮やかな若草色など、窓越しに見えるどの景色も、食い入るように見とれていたが、やがては、同じ田舎の風景にも飽きてきた。絶えまない不安が頭をよぎり、眠ることによってそれを打ち消そうとした。バスを発車する音で目が覚めると、道路際から手を振る、麦藁帽子をかぶった日本人の農業者達数人が見えた。彼らに対して、親しみを感じると同時に、彼らももうすぐ私たちに加わることを考えると気の毒でたまらなくなった。

昼ごろに、小さい街に着いた。「間違いなく、ピュアラップだな。」と誰かが言った。小さい子供を持つ親は、「早く立って、向こうを見てごらん。鶏さんや、太った豚さんがいますよ。」と興奮して話し始めた。一人の都会育ちの男の子は、豚をみて一言こう言った。「ばっちいよ！」

私達を乗せたバスが、信号で止まると、左側に大きな鶏小屋のような、長い掘っ立て小屋が並んでいるのが見えた。ある人が「あの鶏小屋をみてごらんよ。この辺りでは随分と大規模なんだな。」と言った。バスがゆっくりと左折し、驚いたことに鉄条網の門を通り、その大型の鶏小屋の方に入って行った。バスの運転手がドアを開け、衛兵がバスから降りて、ドア際に立った。バスに乗る時、案内役をした、ジムという若い男性が、バスの中を覗いて、「さあ、皆さん、ピュアラップのヨコハマに着きましたよ。降りてください。」と言った。

私達は、愕然として、余りのショックで立ちすくみ、荷物を持つのもやっとの思いであった。ピュアラップでは、前日大雨が降ったらしく、泥濘は、歩くとくるぶしまで沈んでしまうほどであった。待っていた白人の男性が、私達に丁寧に指示をした。「さあ、皆さん、家族ごとに並んでください。これから住宅の割り当てをします。」

私達は、この国営地州営催事場の巨大な駐車場のA区域に立っていた。他にもB, C, D区域が野球場と競走場の近くに建てられていた。このバラックは、希望を持たせるべくハーモニー・収容所と呼ばれた。

私達家族は、独身者用の舎屋から右向かいの2-1-A番の住宅を割り与えられた。それは、2ブロックほどある長くて粗末な馬小屋のようなところであった。私達の部屋は、18 x 20フィート（5.4m x 6m）のリビングルームほどの広さでドア一つと小さい窓がついており、中央に小さい薪ストーブがあるだけで後は、何もなかった。ツェー・バイ・フォー式の床は、地面に直接敷かれており、床の間から、タンポポが生えあがってきていた。母は、そのはびこった黄色いタンポポの花を見て、喜んだ様子で「誰も摘んではいけませんよ。育てるんですから。」と言った。

父は、怒ったように「タンポポを育てる？繁殖しすぎて油断すると髪の毛からも生えてくるかもしれないんだぞ。」と言った。

そこに、残りの荷物を運んできたヘンリーが到着した。「一体どうしたの？」

スミが「タンポポよ。」とだけ言った。

ヘンリーは、タンポポを一掴みにして引っこ抜いた。母は、「やめなさい。ここにある唯一の綺麗なものなのよ。この部屋の中で花壇ができるのに。」

「冗談は、やめてくれよ。お母さん。」

私は、ヘンリーをたしなめるように「お母さんは、本気よ。詩を書くのにインスピレーションが必要なんだから。・・なりけり調のね。私も詩を書こうかしら。」と言った。

あータンポポよ、タンポポよ。  
みんなに嫌がられて、引っこ抜かれて  
その金色の頭を踊らせて、動かしてごらんよ。  
やっと家が見つかったのだから。  
あなたのその黄色の家族になりけり、アーメン！

ヘンリーは、母の黒髪にタンポポをさして言った。「お母さんだったら、これよりも10倍いい詩ができるよね。」

スミは、セーラーバッグにもたれて、「どこに寝るの？床の上じゃないよね。」と心配そうに聞いた。

「そんなに心配するなよ。」ヘンリーは、あきれたように言った。

父と母は、外にでて他の家族がどうしているか様子を見に行き、皆も泥濘をうろうろしていた。まもなくして母が帰ってきて嬉しそうに「私達、ついているわ。トイレが近いところにあるから、歩かなくてもよさそうよ。」と言った。

私達は、母の詩的でしかも実用的な発想に感心して、笑った。しばらくすると父が、まるで物語に出てくるきこりのように前かがみになって、肩に板切れを背負って帰ってきた。父は、コートとズボンのポケットに釘を沢山詰めていた。部屋の角に持って帰ったものをすべて置いて、「大工が残していった木材と釘が沢山あって、皆拾い集めていたよ。私も急いで拾ってきたんだ。これでテーブルと椅子を作れば、快適な暮らしができるかもしれないな。」と言った。

ブロック・リーダーが私達家族のドアをノックし、昼食の時間だと知らせに来た。彼は、近くの食堂で食事をするよう指示した。セーラーバッグから、パイ皿や、錫製のカップ、スプーン、フォークを取り出しているうちにお腹がすいていることに気付いた。食堂に行くと、長蛇の列が並んでいた。子供はその列から泥濘で滑りながら出たり入ったりして落ち着かない様子であった。若者は、片足を交互に上げながら列に並んでおり、「こんなに長く待たされて、せめておいしい食事くらいは、出してほしいよ。」と苛立ちながら不平を言っていた。しかし一世の人たちはほとんど口をきかず静かに腕を組んで列に並んでいた。小雨が振り出し、雨しぶきが私達の黒髪のを濡らしていった。食事を待つ列は、少しずつ前に進んで行った。

昼食は、ふた切れの缶詰のソーセージと、ゆでたジャガイモ、一切れのパンであった。食堂は、余りにも混雑していて、私達家族は離れて座らなければならなかった。私は、座る席がなく、ベンチの間を行ったり来たりして探し回った。一人の小柄な一世の女性が、食事をすませ、ベンチから立ち上がって一人座れるスペースを空けてくれた。ベンチに座ろうとするとそのスペースはたちまち5センチほどに縮んだが何とか座ることができた。私の右側に肱の内側までくっつくように座った一世の男性は、はげ頭の無愛想な人で、食事中も落ち着かない様子であった。左側にいた小さい女の子は、跳ねた泥で汚れていて、鼻水をたらしながら、ソーセージを細かく裂いては、水で混ぜた糊状になった、ジャガイモに混ぜて食べていた。それを見ていた私は、食べ物を飲み込むようにして食べた。

私達は、若くて健康な人用の麻布の簡易ベッドと高齢者用のスチール製のベッドを載せたトラックが来ると、声を上げて喜んだ。ヘンリーは、ベッドの配置を指示していた。父と母は、薪ストーブが一番近い角にベッドを置いて寝ることになり、別の角には、L字型にベッドを配置し、そこは、スミと私専用の寝室兼リビング・ルームだと勝手に決めた。ヘンリーは更に自分が使う男用のスペースをドアの横に作った。もし私が配置を決めたとしたら、父のホテルの寮のようにベッドを一箇所にきちんと並べたであろう。

私達は、隣は片方だけですむので自分たちの部屋が兵舎の端でよかったと思った。隣との間仕切りは、7フィートだけで天井から4フィートは、オープンになっていた。隣のフナイ夫人は、夜にスミが暗い中でベッドに座り髪を巻いていると、壁越しに、「まあ、スミちゃん、今日も髪を巻いているの？毎日巻いて寝るの？」と聞いた。スミは、手を腰において、怒って壁をにらみつけた。

ブロックごとの監視役をしていた、二世の一人は、勇敢に立ち向かう英雄のような勇ましさを点検に回り、毎晩9時までには部屋に戻るように告げた。10時になるとドアをもう一度たたいて「電気を消してください！」と叫んだ。母は、急いで電気を消した。

兵舎中にきしきしときしむ簡易ベッドの音や、赤ちゃんの鳴き声、大きな咳声がメドレーになって響き渡っていた。私達の心配は、激しく燃える小さな薪ストーブに集中しており、私は、ストーブが溶けて床まで落ちてしまうのではないかと怖かった。しかしその心配もつかの間、急に凍てつく寒さがおそった。ヘンリーと父は、交互にストーブの前で火が消えないように風をあおったが、結局火は消えてしまった。兵舎が静かになると、雨の音が聞こえるようになったかと思うと、すぐにピシャピシャと顔に雨のしずくが落ちてくるのを感じ、まるで多量に出血したように雨で枕がぬれていった。ついに私は、起き上がり、部屋の中央にベッドを動かした。しばらくするとヘンリーも起きてきて、「僕の方にも雨のしずくが沢山落ちてきてるよ。朝一番に起きて、家主に苦情を言わないといけないな。」と言った。

一晩中、人々は起きていたようでベッドを動かす音が聞こえた。私は、眠れずにただ小さな窓を見つめていた。私は、数秒ごとにまぶしい光線が通り抜けるのを見て、母が間に合わせのカーテンを窓につけてくれてよかったと思った。その光は、高い塔から収容キャンプ中に照らされていたもので、24時間体制でトムソン式小型機関銃を持つ衛兵が監視していた。私達が鉄条網で取り囲まれているのを思い出し、怒りで胸が締め付けられるようであった。犯罪者のようにフェンスで囲まれて何をしたというのか？もし罪の疑惑がきせられているのであれば、なぜ、公平に裁判で戦わせてくれないのか？もしかしたら、本当は私にはアメリカ国籍がなく、アメリカ人としてみなされていないのではないだろうか。それでは、私は一体何だったのか。両親のように日本人では決してないのだが。考えてみると父と母でさえ、母国の日本とはほとんどつながりはないし、他のアメリカ市民同様、25年間まじめに働いて政府に税金を払ってきたのだから、日本人というよりもむしろアメリカの外国人永住者であった。

一つだけ確かなことは、その鉄条網は、現実であったことである。もはや私には、そこから立ち去る権利がなくなったのである。それは私が日本人の血統を持っていたからであり、民主主義の理念と理想を持たない人がいたからである。彼らは民主主義という言葉だけでは忠誠心を保障できないと言った。新しい法律ができ、収容所は、その策略であることは、確かであった。私は、胸を焦がすような思いを消して眠りに着こうと、顔を枕にうずめた。

私達のピュアラップでの最初の一週間は、静かな興奮状態に包まれていた。私達が高い塔に座ってトンプソン式小型機関銃を構えている衛兵を恐る恐る覗き込むと、衛兵も私達を見下ろした。ある雨の日に、突然衛兵たちがキャンプ場の普段と違う行動に気付いた。それは、消灯後の時間で土砂降りの雨が、シーツまで濡らしていた。スポットライトをあてたが、ドアがあいて小さい人影が急いで外に出て行くのが見えただけであった。それが、集団脱走のように見えたのだろう。

私達は、物音で目が覚めていた。ヘンリーが、かすれた声で「一体外で何が起きているんだ？」とつぶやいた。

すると母が、悲鳴を上げそうな声で、「ちょっと、聞きなさい。飛行機も空を飛んでいるわよ。」と叫んだ。

父が、「もしかして、我々の収容所に爆弾が落とされるかもしれないぞ。」とゆっくりと言った。

私は、背筋がぞっとする様な不安と恐怖に襲われた。飛行機や車の音がだんだん大きくなってきた。フナイ夫妻が隣から壁越しに小声で話しているのが聞こえてきた。しばらくすると突然飛行機がいなくなり、騒ぎも次第におさまった。

翌朝、状況を把握しようと急いで食堂へ向かった。すると収容所の半分が食中毒にあったというのである。騒ぎの顛末は、具合が悪くなった人達が、トイレに駆け込み、それを衛兵たちは、暴動だと思ったらしく、調査のため飛行機を一機手配したということであった。

ヘンリーは、「衛兵達が、むやみに発砲しなくてよかったよ。さもないととんでもない悲劇になるところだったからね。」と言った。

私達は、まるで瀕死の目にあったかのように身震いをした。

私達は、まもなくピュアラップでの過酷な収容所生活に戻った。私は毎朝6時になると、残酷な料理人が鉄の鍋で料理をする時にたてる大きな音によって、目が覚めた。料理人は、鉄の杓子で普通の人よりも倍の速度で鍋をかき回し、大きな音を、ガンガンたてていた。私は、まだ眠りから覚めぬ目でタオルと石鹸を探し、暗い中を手探りで共同手洗い所まで歩いていった。

私は食堂では、缶詰のイチヂクに、厚いフレンチトーストとインスタント・コーヒーを朝食に食べた。朝食がみぞおちを通るころには、いつもA区域のゲートに駆け込んだ。そこでは、D区域で仕事をしていた被収容者達と列に並んでいた。D区域は、通りをはさんでA区域の向かい側にあっただが、向かい側に行くのに監視人のガードが必要であった。衛兵が入念に通行証を検査し、人数を数えた後に、鉄の門がやっと開いて、私達は、衛

兵に前後ろ護衛され整然とした形成で行進して区域を出た。信号が変わるまで立ち止まったときでさえ、人数確認をするという厳しさであった。道路を渡ってD区域の半ブロックまで来てまた人数を確認させられた。私は、管理事務所で記録係として月に16ドル稼いだが、医者、歯医者、弁護士などの専門職を持つ人たちもわずか、月に19ドルという金額しか稼げなかった。このようにして収容キャンプでは、料理人、医者、下水管の工事、靴の修理、娯楽の提供などは、全て日系人被收容者によるものであった。

私は、人事課で労働時間を記録する仕事をしていた。始めに1万人の被收容者の労働時間をピンク色、緑色、青色、白色の作業表にタイプし、そしてアルファベット順にその表を整理し、束にして箱に入れる作業だった。

私の仕事は、耐え難いほど退屈であったが、間違っても止めたいなどとは思わなかった。管理棟だけが唯一お湯と水が出る近代的な配管設備を備えていた。最初の数ヶ月は、毎朝、数時間タイプを打つ仕事をした後に、洗面所へ行き、熱湯で全身にスポンジバスを施した。時間が余ると、目立たないように合間をぬっては洗面所に戻り、頭にかぶるスカーフを取って汚れた髪と悪戦苦闘していた。お湯を入れた洗面器に頭をつけて、髪を濡らし、櫛でといて、伸ばしたり引っ張ったりした。私は、続ければ効果が出ることを願っていた。

朝急いでD区域に仕事に行き、昼食時になるとA区域に戻り、午後にD区域にまた戻り、仕事が終わると、A区域に戻っていくというのが私の一日であった。消灯時間までの数時間は、友達と話しをしたり、くつろいだりしたが、単調な生活の中でその内、話題も尽きてきた。私達は、毎日のように食いついてくるようなピュアラップの泥濘と悪戦苦闘しなければ、ならなかった。地面は、広大な泥の海で、乾燥して固まりかけても、また雨で土が軟らかくなり、滑りやすい泥になった。

雨靴を買うことにしたスミと私は、キャンプ・バイブルと言われる古着のカタログを見つけ出した。綺麗なゴム製の長靴が数ページあったが、どれも在庫切れとなっていた。そこで私は、クリスに手紙を書き、長靴を2足送ってもらうように頼んだ。1週間後にクリスから返事が来て、「長靴が不足しているみたいです。街中の店を探したけど、なかったですよ。ある店の店員は、シーズンオフだからと言い訳をするように言っていたけど、もっと探してみますね。1番街の大安売りをする店と中古品屋にも行くつもりです。」と書いてあった。

スミと私が履いていた靴は泥でまみれてしまい、雨靴が届くのを待ち望んだ。

しばらくして、やっとクリスから手紙と小包が届いた。「1番街の店にもなかったのですが、家の地階にあった古いゴムの長靴を2足送ります。」と書いてあった。

長靴は、私達の足にちょうど合い、皆に羨ましがられた。しかししばらくすると下駄が收容キャンプ中に流行し始めた。下駄とは、木でできた日本の履物のことである。私は、年配の独身男性が、手作りの下駄を履いて素足を露出しているのを初めてみた時は、とても驚いた。しかし父の知り合いのまたその知り合いが大工だったので下駄を作ってもらうように頼んでもらった。私は派手な赤色の緒の下駄がお気に入りだった。シャワー用の履物として、またにわか雨が降る時に3インチ（約7.5cm）の高さが泥まみれの道を歩くのに役に立った。それから下駄を履くようになってからストッキングも履かなくなったので手間が省けた。

ある日曜日の午後、ホテルで働いていたジョー・スポッチが思いがけず訪ねて来た。被收容者が訪問者をもてなす場所として使われていた、ゲートの内側の小さなラティスの囲いのところで待っていたジョーは、丸顔に満面の笑みを浮かべていた。私達は、彼の愛嬌のある姿を見てとてもうれしかった。ジョーと父は、力強く握手をして、何度も微笑んだ。ジョーは毎週日曜日に着ている古いストライプのスーツを着ていたが、帽子は新しいグレーのもので、それを照れくさそうに持っていた。

ジョーは、父に大きな買い物袋を手渡した。中には大きなグレープフルーツが沢山入っていた。「これは、あなたと奥さんにどうぞ。グレープフルーツが好きでしたよね。」それから、ポケットからナッツやキャンディーを取り出して、「これは、お子さんにどうぞ。」と言った。

私達は、叫んで喜んだ。「ありがとう。ジョー。思いやりがあるのね。」私達は、サムやピーター、モンタナのことなど質問攻めにした。

「皆元気だよ。サムは、今でも酔っ払いを追い払っているよ。みんな以前より、儲けて、酒を飲むようになってる。酔っ払いの客を下まで放り出したり、警察を呼んだりなんてしょっちゅうさ。まるで第一次世界大戦の時のようで、酒を飲んで喧嘩さ。イトイさん、覚えているでしょう。」

私達は、シアトルは、変わりないかと聞いた。

「ビルも何もかもそのままですよ。でも戦争関連の仕事でシアトルに人が来るようになり、人が多くなりました。ビジネスは景気がいいですよ。」と言ってジョーは、高い鉄条網を見て、首を横に振った。

「こんなところに入れられているあなた達を見るのがつらいですよ。理解できませんね。あなた達を生まれたときから、ずっと知っているし、私の友人なんですよ。あー、そろそろ行かないといけません。バスに乗り遅れるから。」

父とヘンリーは、ジョーをゲートまで見送った。彼は、短い別れの挨拶をフェンス越しから言い、はげ頭に帽子をかぶせると急いで歩いて行った。



ジョーが持ってきてくれたグレープフルーツは、ピュアラップに来て初めて見た果物であった。綺麗に輝く丸いグレープフルーツを手にするたびに、ジョーの誠実さに感動して、胸が一杯になった。

一ヶ月もたたないうちに、私たちの部屋は、父のお陰でかなり快適になった。父は、借りてきたのこぎりとハンマーで、板切れから書きもの用テーブルとベンチ、ベッドの上の棚、ベッドの下に目立たないように置いていたスーツケースをのせる木の台を作った。それから、食事用の台所用品を乗せるキッチン・キャビネットを作ってくれた。違法とされるホットプレートはカーテンの後に隠していた。部屋の中で料理をすることは、消防法によって禁止されていたが、誰もがどこかに調理器具を隠し持っていた。

A区域の生活にやっと慣れたころ、ヘンリーがD区域にある収容所内の病院での仕事を志願したことを知らせた。ミニーと家族がD区域に住んでおり、ミニーは病院で看護婦の助手として働いていた。ヘンリーはうれしそうに引越ししなければならないと言ったが、スミと私は、「引越しなんていや！せっかくここで落ち着いてきたのに。」と叫んだ。

ヘンリーは、微笑みながら、「病院の命令だから仕方ないよ。」と言った。

部屋の中を綺麗に改造してくれた父は、部屋を見渡して、「ああー、厄介だなー。せっかくここまでしてきたのに。」と言った。

母だけが唯一、引越しを喜んだ。「晴れた日には、D区域の棟から山が見えると友達が手紙で書いていたわ。野球の特別観覧席の一番上に上ったら、素敵な景色が見えるんですって。引越しはいつなの？」

「まだわからないよ。おかあさん。ここ2、3日のうちに通知が来ると思うけど。」とヘンリーが言った。

その日の昼食後にトラックが私達の部屋の前に止まり、強面のひげを生やした若い2世が出てきて、「2時間後に迎えに来るまでに、荷物をまとめること！」と大声で怒鳴った。

私達は、「全く！」と怒りを吐き出すように言って、荷物をまとめ始めた。まだ乾いていない洗濯物が裏庭にかけてあったが、朝食に使った洗っていない皿やコップと一緒にセーラーバッグに詰め込んだ。父は、棚やキャビネットを壁からもぎ取り、テーブルやベンチと一緒にまとめた。トラックが迎えに来た時には、どうにか準備ができた。身の回り品は、当初の一人につき、スーツケース2つにセーラーバッグ1つという規定よりはるかに増えていたので、セーターや、ジャケット、コート、帽子など重ね着をしなければならなかった。鍋やフライパン、なくてはならない醤油ビン、ラジオ、小型のコン

ロなどは直接手に持つことにした。元気いっぱいのトラック運転手が、荷物や家具をトラックの後ろに放り込み、私たちはその上に腰掛けた。

D区域には、他との区域と違って競馬場や、広い野球場、特別観覧席、家畜展示用のバーン、商用に使用されていたビル、遊園地などが、あった。D区域に住む人は、以前の家畜展示用に使われていた巨大なバーンで食事をとっていた。バーンの端から端まで、数百の長いテーブルとベンチがいくつも並べられていた。

D区域の利点は、一部の人達に奇妙な野心を抱かせたことであつたが、それは他の人が、不快な思いをする結果となつた。ある日無職の体育教師が、食堂の前部の広々とした見事な空間を見て、あるひらめきを受けた。地面は平らで、砂利が敷かれており、大人数の柔軟体操には、最適な場所であると。運動不足になりがちな収容所生活では、筋肉がたるんで太鼓腹になる人が余りにも大勢いて、嘆かわしい状況だと理由をつけた。ある朝柱やビルの壁などいたる所に張り紙が掲示され、「柔軟体操を明日5：30早朝に食堂前にて開始する。全員時間厳守で参加するべし。」と書いてあつた。

「するべし」と言う言葉を見たとき、私の足はすくみ、誰がベッドから無理に引っ張り出そうとしても抵抗しようと思った。翌朝早朝に私達の棟では、唯一母だけが他の夜明け組みと待ち合わせるため、暗闇の中、目を覚まし、起き上がった。母は、「健康のためではなく、興味があるから行ってくるだけよ。若い人達のように、飛び跳ねたら、体がぼろぼろになってしまうわ。」と言つた。

父は、「政府が私に生まれて始めての休暇を下さつたんだ。誰にも邪魔はさせない。」と毛布越しに言い訳をするようにつぶやいた。私達は、心地よく体を休めた。この長い棟の50人以上の住民が、いびきをかきながら、安らかに眠り、脂肪を更に蓄えていったのである。

1時間後に母が疲れ果てた蒸気エンジンのように息を切らしながら帰つてきた。髪は乱れブラウスもスカートの外にはみ出して、そのままベッドに入り込んだ。

「今日は、朝食はいらないわ。休ませて。言葉にならないような拷問だつたのよ。私はただ何もしないで立ってみているつもりだつたのに、目つきの怖いリーダーが、大声で怒鳴りつけて、私にも運動させたのよ。とっても恥ずかしかつたわ。皆と一緒に参加させられて飛び跳ねたのよ。」

「大勢来てた？」私達は母に尋ねた。

「結構大勢来てたわね。でもほとんど年配の人だけで、中には、膝をまっすぐ伸ばせない人もいたわ。リーダーの声は、地面から足が浮き上がるほど、響き渡つたわ。でも、何てたちの悪い日本人なんでしょう。腕が不自由な人で、私達にどう指導したいのか自

分でもできないから、1, 2, 3と数えている時しか理解できなかったのよ。全く今朝はストレスがたまったわ。」

母は、その柔軟体操には二度と行かなかった。母は、年をとりすぎてできないと言い、私達はまだ若すぎてできないと言い訳した。それ以来私達は参加者を募る張り紙を見ても気に留めなかったが、4時間の睡眠でも健康を維持できる男性高齢者や独身男性だけは、早朝から参加していた。彼らは指導者の動きから数テンポ遅れながらも、一生懸命に体操をした。ある朝、その若い指導者が姿を見せなくなり、精神的に参ってしまったという噂が流れた。そして、この健康を取り戻す為のプログラムは自然消滅した。

日曜日だけは、気持ちを顧みる暇もない毎日の忙しい行事から開放され、つかの間の休息が味わえた。朝になると毎週日曜日に来てくれた、エベレット・トンプソン牧師の礼拝に参列した。私達の牧師は、すらりとした長身の男性で、彼の解放的で親しみやすい顔は、たちまち人々を惹きつけていった。日本で宣教師をした経験があり、日本語も流暢に話せたトンプソン牧師は、教会で何年も若い世代の人のために仕えてきた。付き合いの長い牧師や教会で働いていた人達がシアトルから会いに来てくれて、私達は安らぎを覚えた。忘れられたわけではないのだと思えたのだ。

沈んだ気持ちで、野球場にあるチャペル代わりの薄暗い一時しのぎの部屋へ、礼拝に出かけた。説教を聞き、祈りを重ねるごとに我々は、心があらたまり、牧師が、人生に対する新しい見方を形作る手助けをしてくれた。中でもとりわけ印象に残っているのは、ある日曜日、牧師が私達に聖書の詩篇を読むように言った場面だ。何故か、状況と雰囲気からか、まるで聖書の内容から真実の意味を探し求め、安らぎをもとめるかのように私達はゆっくりと誠実に読み始めた。「主が悩みの日にあなたに答え、ヤコブの神のみ名があなたを守られるように。・・・私から遠く、離れないでください。悩みが近づき、助けるものがないのです。主は私の光、救いです。私は誰を恐れよう。主は私の命のとりでです。」

そして、「主よ、あなたは、私のために嘆きを踊りに変え、荒布を解き、喜びを私の帯とされました。私の魂は、あなたを褒めたたえて、黙することはありません。わが神、主よ。私はあなたにとこしえに感謝します。」と、読み終わると、部屋中が平安と畏敬に包まれ、まるで壁が取り除かれ、自由になったようであった。私は、その時收容所の生活は、人生の終わりではなく、我々の人生はまだ始まったばかりであると悟った。そして次第に、我々は、肉体的に虐待されているわけでもなく、また将来危害を加えられるわけでもないのだということが分かるようになった。これから先、起こうる最大の試練は、精神的な事であるだろうと感じたのだ。私は、今までずっと現実、あるいは想像上の人種差別に対し、常に怒りと張り詰めた感情を抱いていた。この收容所生活は、最大の精神的打撃であったが、人々に裏切られたことに対して恨みや皮肉の感情を抱いたところで得るものは何もない。我々自身の心を吟味し、我々の求める神への信仰と生きる道を築く事の方が大切なのであると思えるようになった。

夕食後、私達は、毛布を持って急いで広大な緑色の芝生まで行き、野外のレコードコンサートに聞き入った。レクレーション・リーダーが音楽好きの人からレコードを借りてきて、拡声器を使って音楽を流し、皆も楽しめるように計らってくれた。いつも大勢の若者達が芝生の上に、気楽に寝そべっていたが、音楽が始まると皆静かに聴いていた。寝そべって青空を見ていると一人でいるような気がしてきた。何故かドボルザークやベートベンを聞きながら、頭上を動く波雲を見ていると、いつもは味わえない安らぎを覚えた。

私達は、5月にピュアラップに收容され、8月までまだそこにいた。ピュアラップは、仮收容所だとわかっていたので、内地の收容所に早く移りたかった。いつ、どこに行くのか誰もわからなかった。蒸し暑さで苛立ちがつのり、皆落ち着かない様子であった。ある日、私達のブロック・リーダーが昼食後は、居住棟に残るよう指図した。その午後、二世に同行された白人が大勢やってきて、4箇所が同時に点検され始めた。二世の一人がドアのところに現れ、「さあ、皆さん、ナイフや、はさみ、ハンマー、のこぎりのように危険物や武器になる、違反品を集めに来ました。」と言った。

父の顔が暗くなり、「しかし、私達には、道具が必要なんですよ。ここにあるもの全ては、私が自分の手と数少ない道具で作ったんです。いくらなんでもあんまりじゃないですか。」と言った。

若い男性は、怒りを抑えて、「そんなに怒らないで、小父さん。私はただ上からの命令に従っているだけです。さあ、持っているものを出してください。」と言った。

父は、むっつりとしてジョーがシアトルから送ってくれたのこぎりを手渡した。私達は、父がハンマーと小さい果物ナイフをどこかに隠し持っているのを知っていたが、黙っていた。その二世は、満足した様子で汗をかいた額を拭きながら、隣の部屋に向かったが、浮かない顔をした隣人と、次も口論となっていた。

後に、私達は、日本語で書かれた書物全てを提出するように命令が下された。母は、中央の回収場へ行き、若い男性に嘆願した。「私は、日本語で書かれたものをいくつか持っていますが、決して危険なものではありません。政府はなぜほとんど何も持っていない私からこれらを取り上げようとするのですか？」

二世は、感情を抑えながら、「誰も取り上げたりしないんですよ。小母さん。いずれは、また返してくれるんです。何を持っているんですか？」と聞いた。

母は、微笑んで、「聖書です。教えてください。これのどこが危険だと言うのですか？」と言った。

二世は、手を差し出して、「日本語で書いてあるのなら、渡してください。他には？」と聞いた。

「万葉集もですか？万葉集は、詩集で、日本の古典なんです。」

「それもです。」

「しかしこの中には、破壊的な言葉は一つもないんですよ。」

「繰り返しますが、私は、この命令に従っているだけで、私には責任はありませんから。お願いですから、仕事をさせてください。」

母は、いやいやながら聖書と万葉集を、彼に手渡した。母は、小さいポケットサイズの辞書を取り出して、「これは、渡せません。」と言った。

「一世はこれだから頑固で困る。」とつぶやきながらも、「わかりましたよ。」と言って母を見逃した。

2週間後に、私達は、強制収容所に向けて直ちに移動すると通告された。そのころには、アイダホ州に行くことはわかっていた。父の友人の一人である、ヨシハラ氏は、大工として内陸部の収容所を建てる労働をすることを申し出ていた。彼からの手紙によると、

私達の将来の家は、アイダホ州の広い草原地帯のど真ん中にあります。そこは、太陽が強く照り付けています。植物も動物も何もかも、乾ききっていますが、いい面もあります。素晴らしい自然の川がまるで洪水のように流れています。スネーク川の一部だそうです。収容所の端には大きな棟の病院や見張り塔のような巨大な貯水槽があります。十分な洗濯場やトイレがあります。住宅は、ピュアラップよりも少し大きいですが、余り期待はできません。いずれにしてもここも収容所なのでから。

私達は、見知らぬ場所に行くのを楽しみにしており、インディアンの名前の「アイダホ」と言う響きが気に入っていた。私は、雑誌のナショナル・ジオグラフィックで見た明るくて暑いアイダホの写真を思い出した。日に焼かれた地形、乾ききった泉、成長が止まったようなヤマヨモギや醜いガラガラヘビの巣などがあった。快適なところではなさそうだったが、今までと違うということだけは確かだった。

## 用語について

言葉というものは、現実を正確に描写したり、または婉曲したりする能力を持つ。第二次世界大戦中に、連邦政府の役職者達や米軍は、当時アメリカに在住した日本人の血統を持つ人々の行動について説明するのに婉曲的な表現を数多く使った。当時のこの虚言は、最近になって、政府当局の調査の実証（戦時中の市民の再定住と強制収容に於ける委員会の報告書である「*Personal Justice Denied*—個人の正義が否認される。」と題した文書）や他の資料を使って、検証されることになったのである。

当時一般的に使われていた婉曲用語や表現は、今日でも使われるべきであろうか？これは、生徒、教師そして歴史を正確に伝えたいと思う人にとっては、大変重要な、疑問である。現在この問いに対する明確な答えはない。多くの日系アメリカ人、歴史家、教育者そして他の人が過去を正確に表現するために、適当な言葉を使おうとしている。その一例として、「非難」という表現に対し、「撤退」または、「日系アメリカ人が西海岸から強制撤去される。」という表現が使われている。戦時中の市民の再定住と強制収容に於けるアメリカ連邦議会の委員会や、多くの日系アメリカ人、他の信頼できる有力な資料では、その時代を正確に表現するため、同用語を使っている。

デンショウでは、ロジャー・シモムラ氏の作品のウェブサイトなど、資料を制作する際にデンショウの手順を説明するために用語の組織方針を決めた。殆どの場合、デンショウ単独で開発した資料の中では「非難」という用語のようになかつて使用された婉曲語を使用することを避けている。しかし多種多様の用語を使う作家の方々や組織、他の団体と協力して資料を作成する場合は、デンショウは他の団体に合わせて用語を統一することにしている。例えば、デンショウのメインのウェブサイト ([www.densho.com](http://www.densho.com))のカリキュラムで、「市民権と日系アメリカ人の強制収容」は、SPICE〔スタンフォード大学の国際、及び比較文化プログラム〕とデンショウによる共同制作であった。このカリキュラムでは、「非難」や「強制収容所」を使用している。

デンショウでは、1940年代にある血統をもつという理由だけで冷遇を受け、連邦政府によって使用された婉曲的な用語について真剣に考えることを個人一人一人に薦めたい。「非難」の本当の意味は何であるか。「仮収容所」という言葉を聞いたときにどんなイメージが頭に浮かぶか。当時の時代を正確に伝えるためにはどうすればいいのか。これらの言葉によって、当時の出来事や条件はどのように捻じ曲げられたのか。以下の説明は、デンショウによって制作された用語の比較とお薦めする使用法である。

第二次世界大戦中にアメリカ連邦政府によって不当に拘束された人々の3分の2がアメリカで生まれた日本人の血統をもつ二世であった。彼らを説明するのは、「日本人」ではなく、「日系アメリカ人」が正しい用語である。二世の親は、一世と呼ばれ、アメリカの法律によってアメリカ市民として帰化することを禁止されていた。1952年に移民法が改正されるまで日本からの移民達は、外国人として見なされていた。

第二次世界大戦が始まった頃には、殆どの一世代はアメリカに数十年間定住し、家族を築いていた。原則的には外国人であり、民族的には日本人のままであったが、彼らの多くはアメリカで永続的に定住し、アメリカを自国と見なした。多くが、日本に戻るつもりはなく、許されることであれば、アメリカに帰化していたであろう。この条件を考慮し、デンショウや他の資料では、一世や二世のことを「日系アメリカ人」という用語を使用している。

1942年の初め、日系アメリカ人は、西海岸から強制的に撤去させられ、自分達の家に戻ることを禁止された。連邦政府は、日系アメリカ人の安全を守るための「避難」であるという婉曲的な用語を用いたが、実際には経済的な強欲や人種差別が理由であった。日系アメリカ人は、西海岸から追放され、戻ることを禁止されていたので、「撤退」や「大量撤去」が適当である。まず初めに日系アメリカ人は、一時的な、「assembly center—集合センター」と呼ばれる収容所に収容され、そこは許可なしでは外に出ることもできないフェンスで囲まれた所であった。この場合は、「仮強制収容所」または、「仮捕虜収容所」と表現するのがこれらの施設の状況を伝えるのに適切である。〔注：デンショウでは、「assembly center—集合センター」という表現は、「ピュアラップ集合センター」のように固有名詞と共に使用したり、または、その施設を説明するのに引用符をつけて「集合センター」として使用したりしている。多くの人が「集合センター」と「仮強制収容所」との関連性がわからないので、分かりやすくするために、この用語を使用している。〕

西海岸から撤退され、日系アメリカ人は、政府が「Relocation Center—再定住センター」と呼んだ収容所に監禁された。実際は、鉄条網で囲まれ、衛兵によって監視された、許可なしでは外へ一歩も出ることのできない捕虜収容所であった。「再定住センター」は、過酷な条件の中収容所で監禁されたことを説明するのには、不適切な婉曲表現であり、従ってこの場合は「強制収容所」または、「捕虜収容所」という用語が使用されている。

アメリカ市民に対して「捕虜」という用語を使用するのは、問題をはらんでいる。原則的には、戦時中に敵国の外国人を拘束するのに使われる用語である。日系アメリカ人の3分の2がアメリカ市民であった。「捕虜」という用語は一般的に使われるが、デンショウでは、外国人である場合のケースを除き、「強制収容」という用語を使用している。

従って、「日系アメリカ人」（日本人ではない。）は、「強制的に撤退させられ」（非難させられたのではない）；最初は「仮強制収容所」、または「仮捕虜収容所」へ送られ、（集合センターではない）；その後、「強制収容所」または、「捕虜収容所」（再定住センターではない）、「強制収容された」、または、「監禁された」というのが適切である。

デンショウの用語は、Civil Liberties Public Education Fundによって導入された「用語の変換」と統一されている。（ウェブサイトの <http://www.momomedia.com/CLPEF/backgrnd.html> をご覧ください。）。

## 他のリソース

### 日系アメリカ人の経験

#### ウェブ・リソースへのリンク

以下のリストは、包括的ものではなく、写真や文書などの情報豊かなソースを含むウェブサイトへのリンクを提供するものである。

#### 退去及び監禁 - 一般

- [www.cr.nps.gov/history/online\\_books/anthropolgy74/](http://www.cr.nps.gov/history/online_books/anthropolgy74/)  
「Confinement and Ethnicity: 第二次世界大戦中に於ける日系アメリカ人の強制収容所の概要」(国立公園局)のウェブサイト
- [www.oac.cdlib.org/dynaweb/ead/calher/jvac/@Generic\\_BookView](http://www.oac.cdlib.org/dynaweb/ead/calher/jvac/@Generic_BookView)  
戦時中の日系アメリカ人の強制疎開と再定住の写真7000枚がカリフォルニア・バークレー大学にて保管されており、「Container List」をクリックするとご覧いただけます。
- [www.sfmuseum.org/war/evactxt.html](http://www.sfmuseum.org/war/evactxt.html)  
サンフランシスコ在住の日本人の抑留と撤退-1942年 サンフランシスコ市立美術館のウェブサイト
- [www.csuohio.edu/art\\_photos/](http://www.csuohio.edu/art_photos/)  
アメリカの強制収容所(マスミ・ハヤシ教授による強制収容所に収容された生存者の写真)のウェブサイト
- [www.csuohio.edu/art\\_photos/famalbum/famalbum.html](http://www.csuohio.edu/art_photos/famalbum/famalbum.html)  
ファミリー・アルバム・プロジェクト(アメリカ及びカナダの収容所の被収容者によって撮影された写真集)のウェブサイト
- [americanhistory.si.edu/perfectunion](http://americanhistory.si.edu/perfectunion)  
「A More Perfect Union: 日系アメリカ人とアメリカの憲法」(スミソニアン・インスティテューション、アメリカ史の国立美術館のウェブサイト)

#### 収容キャンプ場について

- [www.lib.washington.edu/exhibits/harmony/Exhibit/default.htm](http://www.lib.washington.edu/exhibits/harmony/Exhibit/default.htm)  
ハーモニー収容所(ワシントン大学展示)のウェブサイト
- [chem.nwc.cc.wy.us/HMDP/](http://chem.nwc.cc.wy.us/HMDP/)  
ハート・マウンテン収容所のデジタル保存プロジェクトのウェブサイト
- [www.qnet.com/~earthsun/manzanar.htm](http://www.qnet.com/~earthsun/manzanar.htm)  
マンザナール収容所: アメリカの強制収容所のウェブサイト
- [dizzy.library.arizona.edu/wracamps/](http://dizzy.library.arizona.edu/wracamps/)  
アリゾナ州の強制収容所(ポストンとヒラ・リバー収容所のアリゾナ大学での展示)のウェブサイト



- [www.lib.utah.edu/spc/photo/9066/9066.htm](http://www.lib.utah.edu/spc/photo/9066/9066.htm)  
第二次世界大戦中の日系アメリカ人の強制収容所（チュール・レイク及びトパズ収容所のユタ大学での展示）のウェブサイト

### 兵役と徴兵召集の抵抗

- [www.lib.washington.edu/exhibits/harmony/Exhibit/default.htm](http://www.lib.washington.edu/exhibits/harmony/Exhibit/default.htm)  
憲法と補償（レジスターズ・ドット・コム of ハートマウンテン・フェア・プレイ委員会）のウェブサイト
- [www.webcom.com/akato/](http://www.webcom.com/akato/)  
「Service Battery: 442 戦闘部隊の自叙伝」のウェブサイト
- [www.javoice.com/index.html](http://www.javoice.com/index.html)  
JA ボイス・ドット・コム of ウェブサイト

### カリキュラムと教育

- [www.intranet.csupomona.edu/~tassi/intern.htm#abstract](http://www.intranet.csupomona.edu/~tassi/intern.htm#abstract)  
「Citizenship Denied: 日系アメリカ人が強制収容された統合施設」のウェブサイト
- [academic.udayton.edu/race/index.htm](http://academic.udayton.edu/race/index.htm)  
日系アメリカ人の強制収容所での抑留（デイトン大学のヴァネリア R・ランダル教授による「人種、人種差別と法律」）
- [www.yale.edu/ynhti/curriculum/units/1982/3/82.03.01.x.html](http://www.yale.edu/ynhti/curriculum/units/1982/3/82.03.01.x.html)  
エール大学のウェブサイト「When Military Necessity Overrides Constitutional Guarantees: 第二次世界大戦中の日系アメリカ人に対する待遇」（エール・ニュー・ヘイブン・ティチャーズ・インスティテュートによって作られたカリキュラム）やや古い（1982年に書かれたもの）。1983年の連邦政府の研究によると（CWRIC）このタイトルからもわかるように、軍事上の必要性ではなく人種差別が憲法上の権利を優越した。
- Farewell to Manzanar—マンザナル収容所よさらば（Facing History and Ourselves & Voices of Love and Freedom)による小説「Farewell to Manzanar」の教師のためのリソース。The Facing History のホームページ、[www.facing.org](http://www.facing.org) から、resource をクリックし、次に Study Guides をクリックしてください。

### 印刷物のリソースからの引用

#### 日系アメリカ人の歴史 — 一般

- フランク F・チューマン著「The Bamboo People: 法律と日系アメリカ人」カリフォルニア州デルマー：1976年 パブリッシャーズ
- ロジャー・ダニエルズ著「Asian America: 1850年以降のアメリカにおける中国人とアメリカ人」ワシントン州シアトル：1988年ワシントン大学プレス

- ロジャー・ダニエルズ著「The Politics of Prejudice: カリフォルニア州の排日運動と日本人移民禁止法の苦闘」1962年初版 カリフォルニア州バークレー: 1977年カリフォルニア大学プレスより改訂版発行
- スティーブン・フギタ、ディビッドJ・オブライアン共著「Japanese American Ethnicity: 地域社会の固執」1991年ワシントン州シアトル: ワシントン大学プレス
- ユウジ・イチオカ著「The Issei: 1885年～1925年一世の日本人移民の世界」ニューヨーク: 1990年フリー・プレス
- カズオ・イトウ著「Issei: 北米の日本人移民の歴史」、シンイチロウ・ナカムラ、ジーンS. ジェラード訳 ワシントン州シアトル: 1973年一世の出版実行委員会、北米の日本人移民の歴史
- ポールR・スピッカード著「Japanese Americans: 人種の形成と変換」ニューヨーク: 1996年トゥエイン・パブリッシャーズ
- ディビッド・ヨオ著「Growing up Nisei: 1924年～49年一カリフォルニア州の日系アメリカ人の人種、世代、そして文化」イリノイ州アーバナ: 2000年イリノイ大学プレス

## 第二次世界大戦中の強制収容

- 戦時中の市民の再定住及び抑留（強制収容）委員会「Personal Justice Denied: 戦時中の市民の再定住及び抑留（強制収容）委員会」1982年初版 ワシントン州シアトル: 1997年ワシントン大学プレス改訂版発行
- ロジャー・ダニエルズ著「Concentration Camps: 北米編; 第二次世界大戦中のアメリカ及びカナダの日本人」1971年初版フロリダ州マラバー: 1993年クリガー・パブリッシング改訂版
- ハーヴィーC・ガーディナー著「Pawns in a Triangle of Hate: 日系ペルー人とアメリカ」ワシントン州シアトル: 1981年ワシントン大学プレス
- ピーター・アイロンズ著「Justice at War: 日系アメリカ人の抑留（強制収容）事例のストーリー」カリフォルニア州バークレー: 1983年カリフォルニア大学プレス
- エリックL・ミューラー著「Free to die for Their Country: 日系アメリカ人の徴兵召集抵抗者」シカゴ、ロンドン: 2001年シカゴ大学プレス
- グレッグ・ロビンソン著「By Order of the President: ルーズベルト大統領と日系アメリカ人の抑留（強制収容）」マサチューセッツ州ケンブリッジ: 2001年ハーバード大学プレス
- ジョン・タテイシ著改訂版「And Justice for All: 日系アメリカ人の強制収容所の口述歴史」1984年初版ワシントン州シアトル: 1999年ワシントン大学プレス改訂版発行

- テンブロック, ジェイコブ, エドワード N. バーンハート, 及び フロイド W. マットソン著「Prejudice, War and the Constitution: 第二次世界大戦中の日系アメリカ人の撤退の要因と影響」カリフォルニア州バークレー: 1968年カリフォルニア大学プレス
- ミチ・ウエグリン著「Years of Infamy: 明かされなかったアメリカの強制収容所」1976年初版 ワシントン州シアトル: 1996年ワシントン大学プレス改訂版発行

## 補償及び賠償と誤審の賠償請求事例

- ロジャー・ダニエル、サンドラC・テイラー及びハリーH. L. ・キタノ共著「Japanese Americans: 強制収容から賠償まで」ユタ州ソルトレイク・シティ: 1986年ユタ大学プレス
- レスリーT・ハタミヤ著「Righting a Wrong: 日系アメリカ人と1988年の『人権擁護令』の一節」カリフォルニア州スタンフォード: 1993年スタンフォード大学プレス
- ウイリアム・ミノル・ホオリ著「Repairing America: 日系アメリカ人の賠償運動の評価」ワシントン州プルマン: 1988年ワシントン州立大学プレス
- ピーター・アイロンズ著改訂版「Justice Delayed: 日系アメリカ人の抑留（強制収容）事例の記録」コネチカット州ミドルタウン: 1989年ウエスレアン大学プレス
- ミッシェル・マキ他著「Achieving the Impossible Dream: 日系アメリカ人がどのようにして賠償金を勝ち取ったか」イリノイ州アーバナ: 1999年イリノイ大学プレス
- ロバート・シマブクロ著「Born in Seattle: 日系アメリカ人の賠償運動」ワシントン州シアトル: 2001年ワシントン大学プレス
- エリックK・ヤマモト、マーガレット・チョン、キャロルL. イズミ、ジェリー・カング、フランクH・ウー共著「Race, Rights and Reparation: 日系アメリカ人の抑留（強制収容）と法律」ニューヨーク州ガイサーズバーグ: 2001年アスペン・ロー&ビジネス

## 芸術と文学

- アレン・イートン著「Beauty Behind Barbed Wire: 戦時中の強制疎開（収容所）での日本人の芸術」ニューヨーク: 1952年ハーパー
- デブラ・ジェセンズウエイ、ミンディ・ローズマン共著「Beyond Words: アメリカの強制収容所の印象」ニューヨーク州イサカ: 1987年コーネル大学プレス

- カレン・ヒガ著「The View From Within: 1942年～1945年強制収容所における日系アメリカ人の芸術」カリフォルニア州ロサンゼルス: 1994年日系アメリカ人ナショナル・ミュージアム
- ヒル、キミ・コダニ著改訂版「Topaz Moon: チウラ・オバタの強制収容所の芸術」カリフォルニア州バークレー: 2000年ヘイデイ・ブックス
- ビル・ホソカワ著「Out of the Frying Pan.」コロラド州ニウオット: 1988年コロラド大学プレス
- ミツエ・ヤマダ著「Camp Notes and Other Poem」カリフォルニア州サンロレンゾ: 1976年シェイムレス・ハシー・プレス
- ヒサエ・ヤマモト著「Seventeen Syllables and Other Stories」ニューヨーク州ラーサム: 1988年 キッチン・テーブル - ウーマン・オブ・カラー・プレス

## ビデオ

日系アメリカ人の撤去と強制収容に関するビデオの完全リストをご覧になりたい方は、ナショナル・アジア・アメリカン・テレコミュニケーションズ・アソシエーションのウェブサイト、[www.naatanet.org/shopnaata/videos/subject/japanese.html](http://www.naatanet.org/shopnaata/videos/subject/japanese.html) をご覧下さい。

- フランク・アベ作「Conscience and the Constitution: 第二次世界大戦中の日系アメリカ人の抵抗」ニュージャージー州ホーホクス トランジット・メディア2000 第二次世界大戦中に於ける日系アメリカ人の徴兵召集の抵抗
- ローニ・ディング作「The Color of Honor」1988年 第二次世界大戦中の日系アメリカ人兵を調査したもの
- エリック・ポール・フォーニア作「Of Civil Rights and Wrongs: フレッド・コレマツ・ストーリー」1999年
- スティーブン・オカザキ作「Unfinished Business: 日系アメリカ人の抑留（強制収容）事例」1984年サンフランシスコ: ムーチェッテ・フィルム・プロダクション  
日系アメリカ人の強制収容に対する法的な異議申し立てを調査したもの
- スティーブン・オカザキ作「Days of Waiting」1988年
- エミコ・オオモリ作「Rabbit in the Moon」1999年

## 9月11日アメリカ同時多発テロ関連

- 教育開発センター株式会社（EDC）作 「Beyond Blame: テロ攻撃の反応」 ミドル・スクールとハイスクールのカリキュラム用 The Justice Project and Vietnam Veterans of America Foundationの協力によりEDCが作成。無料の雑誌は、EDCのウェブサイト [www.edc.org/](http://www.edc.org/) までお問い合わせください。
- 市民権プロジェクト「Statement Concerning Discrimination Against Muslims and Arab Americans, September 14, 2001」

ハーバード大学の市民権プロジェクトより  
のアドレス：[www.law.harvard.edu/groups/civilrights/](http://www.law.harvard.edu/groups/civilrights/)

ウェブサイト

- 「Us and Them」歴史と我々に目を向けて。あの恐ろしい2001年9月11日のテロ事件について熟考させ、討論を促進するために作成されたもので、容疑者となる特異性を浮き彫りにする。ウェブサイトのアドレス：  
[www.facinghistory.org/facing/fhao2.nsf/all/September+Lesson+UsThem?opendocument](http://www.facinghistory.org/facing/fhao2.nsf/all/September+Lesson+UsThem?opendocument)
- テロ事件に関するメディア・リテラシーを教えるためのもの。国際問題評議会によって開発されたカリキュラムで自由報道とメディアの軍事的役割を意味するテロリストとプロパガンダ活動の定義について分析。ウェブサイトのアドレス：  
<http://www.world-affairs.org/archive/globalclassroom/MediaLitOnline.pdf>

### 中高生の皆さんにお薦めの資料

以下のタイトルは、リーディング・レベル別に注釈したものです。PMは、primary（初級レベル）、IMは、intermediate（中級レベル）、MSは、middle school（ミドルスクール・レベル）、HSは、high school（ハイスクール・レベル）の略です。

- アンセル・アダムズ（写真）、ジョン・ハーシー（文）「Manzanar」ニューヨーク：ヴィンテージ・ブックス 1989年 [ミドルスクール・レベル] アメリカの写真家の中でも有数のアンセル・アダムズによってフォト・エッセーが完成する。写真の原物は、議会の図書館に保管されている。
- スティーブン・チン著「When Justice Failed：フレッド・コレマツ事例」オースティン：1993年レインツリー・ステッカーヴォーフ [中級レベル] 第二次世界大戦中の強制収容政令を拒否した日系アメリカ人の経験に関連したもので最高裁に上訴された事例。
- ダニエル・ディビス著「Behind Barbed Wire：第二次世界大戦中の日系アメリカ人の収監」ニューヨーク：1982年 イー・ピー・ダットン [ミドルスクール・レベル] 日系アメリカ人がどのようにして、切り抜けて生きたか、収監という冷遇の中で生活したか、戦後解放されて再出発したかを説明している。
- シーラ・ゲリーグ著「The Eternal Spring of Mr. Ito.」1985年 [中級レベル] 日本による真珠湾攻撃によって、カナダ・ブリティッシュ・コロンビア州のある家族の下で庭師として働いていたイトウ氏の世界は打ち砕かれる。同氏は、家族とともにカナダの仮収容所に送られることになる。

- シーラ・ハマナカ著「The Journey」ニューヨーク：1990年オーチャッド・ブックス [ミドルスクール・レベル] 第二次世界大戦中に強制収容された日系アメリカ人の窮状が言葉とアート・ワークによって明らかになる。
- ゴードン・ヒラバヤシ著「Good Times, Bad Times:理想主義は現実主義」カナダ・ブリティッシュ・コロンビア州アーゼンタ：1985年アーゼンタ・フレンズ・プレス [ハイスクール・レベル] ヒラバヤシ氏自身による生い立ちの談話、大統領命令 9066 号の異議申し立て、同氏の事例の最高裁に上訴される前、最後の立証
- ジーン・ワカツキ・ヒューストン及びジェームスD. ヒューストン共著「Farewell to Manzanar」ボストン：1973年ホートン・ミフリン [ミドルスクール・レベル] ジーン・ワカツキ・ヒューストンが、強制収容所で育った当時を反映したもので、真珠湾攻撃前の家族の人生、強制収容、帰郷後の影響を説明している。
- ピーター・アイロンズ著「The Courage of Their Convicts:最高裁に上訴するために戦った16人のアメリカ人」ニューヨーク 1988年ペンギン・ブックス [ハイスクール・レベル] 著者が、第二次世界大戦中の強制収容政令に異議申し立てをしたゴードン・ヒラバヤシ氏を初め、人権のために戦った人たちの声を読者に紹介する。
- ジョイ・コガワ著「Naomi's Road」トロント：1986年オックスフォード大学プレス [初級レベル] カナダ・バンクーバーよりブリティッシュ・コロンビア州の仮収容所に移り、その後アルバータの農場に移ったナオミと兄スティーブンのストーリー
- エレン・レヴェイン著「A Fence Away from Freedom:日系アメリカ人と第二次世界大戦」ニューヨーク 1995年G. P. プットナムズ・サン [ミドルスクール・レベル] 子供の頃に強制収容所に収容された日系アメリカ人のストーリー
- ケン・モチヅキ著「Baseball Saved Us.」ニューヨーク：1993年リー&ロー・ブックス [初級レベルよりやや高め] 第二次世界大戦中に家族とともに強制収容所に収容された日系アメリカ人が野球をすることを学び、終戦後野球を通して立ち直っていく。
- ノミ (ペンネーム) 著「Nisei Odyssey—強制収容所での年月」カリフォルニア州ファウンテン・ヴァリー 1991年ボーダー・プレス [ハイスクール・レベル] 第二次世界大戦中に強制収容所に収容された日系アメリカ人の思い出やストーリー
- ケンジロウ・ノムラ著「An Artist's View of the Japanese American Internment」ワシントン州シアトル 1991年ウイング・ルーク・アジア・ミュージアム [ミドルスクール・レベル]

アイダホ州ミニドカ収容所にて収容されたアーティストによって製作されたスケッチや絵画

- ジョン・オカダ著「No-No Boy」ワシントン州シアトル：1976年ワシントン大学プレス [ハイスクール・レベル] アメリカ軍に服役しなかった日系アメリカ人が収容所から解放され、シアトルの家に帰る。
- ミネ・オオクボ著「Citizen 13660」ワシントン州シアトル：1983年ワシントン大学プレス [ミドルスクール・レベル] 第二次世界大戦中の収容所での作者自身の経験の思い出より：描画も著者によるもの
- ページ・スミス著「Democracy on Trial：第二次世界大戦中の日系アメリカ人の撤退と強制疎開（強制収容）」ニューヨーク 1995年サイモン&シュースター [ハイスクール・レベル] 軍事的、政治的、経済的、人種差別的そして個人的な動機による強制収容という苛酷な環境で、芸術や文化の豊かさを生活の中に築く能力を発揮した普通の人々の経験を再現
- モニカ・ソネ著「Nisei Daughter」ワシントン州シアトル 1953年ワシントン大学プレス [ミドルスクール・レベルよりやや高め] 1930年代のシアトルでの生活やアイダホ州ミニドカ収容所に強制収容された著者と家族について
- ジェリー・スタンリー著「I Am an American：日系アメリカ人の強制収容の真実」ニューヨーク 1994年クラウン・パブリッシング [中級レベル] 1人の高校生に焦点を置き、12万人の日系アメリカ人が政府によって強制収容された年代記
- シチャン・タカシマ著「A Child in Prison Camp.」ケベック州モントリオール 1971年タンドラ・ブックス [中級レベル] 戦争中に強制収容所で暮らした子供たちの体験談
- ヨシコ・ウチダ著「The Bracelet」イラスト：ジョアン・ヤードリー ニューヨーク 1993年フィロメル・ブックス [初級レベルよりやや高め] 当時小学校二年生だった日系アメリカ人のエミは、真珠湾攻撃後、家から出ることを強要される。親友からもらったブレスレットを亡くしたことで、友情に物質的なものは必要ないことを証明しようとする。
- ヨシコ・ウチダ著「Desert Exile」ワシントン州シアトル 1982年ワシントン大学プレス [ミドルスクール・レベル] 1942年の連邦政府による強制収容の著者の自叙伝
- ヨシコ・ウチダ著「The Invisible Thread」ニューヨーク 1991年サイモン・アンド・シャスター [ミドルスクール・レベル] バークレーで育ち、戦時中にユタ州の強制収容所に収容された著者の自叙伝
- ヨシコ・ウチダ著「Journey Home」イラスト：チャールズ・ロビンソン

ニューヨーク 1978年アラジン・ブックス [中級レベル] ユキと両親が終戦後収容所から解放され、人生のやり直しをするが、人種差別や暴力に遭う。

- ヨシコ・ウチダ著「Journey to Topaz」イラスト：ドナルド・キャリック カリフォルニア州バークレー 1971年クリエイティブ・アーツ・ブックス [中級レベル] 11歳のユキと家族は真珠湾攻撃後、日本人の血統をもっているという理由だけで強制収容され、冷遇に耐える。
- ヨシコ・ウチダ著「The Big Book of Peace」からの抜粋、57ページ～61ページ『強制収容所からの手紙』ニューヨーク 1990年ダットン・チルドレンズ・ブックス [中級レベル] ジンボーは、友達に手紙を書き、第二次世界大戦中の強制収容所での生活を知らせる。
- ヨシコ・ウチダ著「Picture Bride」フラッグスタッフ 1987年ノースランド・プレス [ハイスクール・レベル] まだ一度も会ったことのない結婚相手、タロー・タケダの写真を持って、1917年、ハナ・オオミヤはサンフランシスコに到着する。ハナは、1900年代初期に写真花嫁としてアメリカに渡った数百人の一人であった。
- アーサー・ジック著「National Geographic」の『日系アメリカ人—ついに帰郷する』512ページ～538ページ 1986年4月 [中級レベル] 第二次世界大戦中に強制収容された日系アメリカ人のストーリーに関連したもので、日系アメリカ人を成功した模範的な少数民族として捉えている。しかし、他の少数民族から反感をかう上に、白人のものさしで判断していると見なされ、多種多様な民族を単純化し過ぎるため、そういった肩書きを貼られることに対し難色を示す日系アメリカ人も多い。